川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

Senryu Zasshi

Pensoj flugas trans la land-limon

八月號

No. 257

昭和廿一年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿三年八月一日經行 第三卷 第七號
（毎月一回一日發行）
創刊大正十二年一・通卷二百五十七號

祝辭

恩師麻生路郎先生還暦祝賀の川柳大會に一言およろこびを述べさせて頂くことは門下生の一人として非常に光榮と存じます。

因來先生は熱情硬骨の士路郎老などゝ老の敬稱を贈るが如きことは米壽の將來においても不適當であります。先生は決して老ゆることのない川柳家であります。

このことは先生がかつて滿蒙視察談に長講三時間の辯に尙綽々の余裕を示されたこと、或は玉出、岸の里等の御宅で談論風發夜を徹して門葉の育成に努められた如き幾多の感激的な事例に徵し更に柳歷四十五年の長年月に亘つて終始一貫、川柳の社會化と向上進展の爲めに盡瘁され日本六十余州はおろか遠く海外に迄行脚の歩を進められた過去不退轉の御努力と御精進の跡を想倒し、燃ゆるが如き川柳魂の精神と高邁なる御識見をかへり見るときその然る所以を明確に知ることが出來るのであります

先生の御高德、御事歷並に茂乃奥樣はじめ御家庭の川柳愛等につきましては余りにも著名な事實でありますが茲に贅言を差控えさせていただきます。

先生は大正の昔柳壇に三十年計画を発表され着々としてその貫現を圖つて來られましたが本年本卦がへりの基点に立たれ新たなる構想のもとに川柳の復興運動を興さるゝことと信じます。どこ迄も將來に突進し雄圖に奔命せらるゝ先生のことですから今後の御活躍が期して待たれわれ〳〵後進の勇躍を禁じ能わざるところであります。

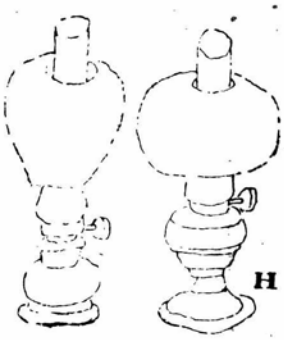
われ〳〵不朽洞の盟友壱百有余先生至高至純の御指導を仰ぎつゝ益々その提携を固くし愈々精進を新たにして先生の御負託に應え柳壇の進展に寄與せんことを期するものであります。

茲に先生還暦祝賀の大會に當り過去の御高恩を拜謝すると共に先生の御健康を祝福し併せて御自愛御加餐をお祈りする次第であります。

一言以て祝辭と致します。

昭和二十三年七月十一日

福田山雨樓



麻生路郎先生
還暦祝賀川柳大會記

高鷲亞鈍

日時七月十一日(正午—夕八時)
場所オメガハウス三階大阪戎橋

此日、早朝地軸を搖がすやうな豪雨も次第に、ゆるくなり梅雨のやうなシト〳〵降りに、どうかと思はれたが正午の開會前後はカラリと晴れて赫つと夏の太陽が激しく大阪の屋根々々に照る。あたかもこの日の主人公の氣性のやうに。雨にならうと風にならうと、或は灼熱炎天が暗雲を破つて火の柱とならうと、今日の還暦祝ひは川柳大會とはいへ、お祭り行事位でことすみさうにも思はれぬ。橋筋を往來する輕裝の男女も漸やく繁く、オメガハウスの入口の立札に瞳をとめる。

開會前の十時ごろからは、立札を見さだめるや直ちに三階の大會場へ足を運ばす人が多くなつてきた。會場の準備は如何に、さすがに路郎門下の川柳不朽洞會員が三ケ月前から滿を持してゐた丈あつて一切の手筈準備はよろしい。正面にはプログラムが幾旒となく垂れ下つてゐて、兼題七題、席題五題、それに特別兼題「還暦」麻生路郎選が一番に目に飛びこむ。披講壇にはマイクがぐるりを銀色に光らし世紀の聲を待つてゐる。十一時を過ぎたころには三百を用意した椅子席三分の空き。東京から、名古屋から、西は山口、呉、岡山、姫路から、山陰は鳥取出雲、から、四國は今治新居濱から、京都、神戸の近隣都市から出席された人達であらう。會場内で辨當をひろげてゐたり、なにはさて措き席題をみて、早速、句作に余念ない者もある。十年ぶり、二十年ぶりに逢つて、互ひの白髮のふへた事を笑ひながら久濶を語る古い柳人達。そこ、こゝで路郎先生と川柳機緣をいみじきものと喜び、話の花が咲いてゐる。開會を待つまを一言にして評せば、芝居の幕を待つてゐるやうで、賑やかなこと、やかましいこと、それでゐて愉しげな笑の渦がおこつてゐる。東側の壁には富士野鞍馬氏の祝吟「還暦はまだこれからの卓たゝく」が鮮かな達筆で、本日の路郎先生の心境を詠つてある。正午近く開會間際になつてくると俄然、受付が忙しくなつてきた。潮花さんの率いる薊會の美しい閨秀川柳家、實はお孃さん達の御接待はさわりがよい。中に交つて、今日の還暦をお父さんに持つナナちやんが知らぬまにお愛想をしてゐる。今日の僕は記者である。任務上インタービュウをすると「まあお珍らしい、亞鈍さん！」「しばらく。ところでお芽出度う。」「亞鈍さん、ちつとも變つてないわね」「どう致しまして私の白髮を見て下さい。」「ちつとも變つてないわ」「あんまり、私の顏を見んといて下さい。綺麗な貴女が前にゐると羞しい。ところでアート君やリリちやんは。」「今日は、姉弟がみんなくる筈よ。」「さう。それが本當。還暦祝は子供からするのが當然だからね。」「私、今日はとても嬉しいのよ。みなさんのお蔭で……。私、お父さんの偉いことが判つてきたやうな氣がしますの。」「その通り、貴女は川柳家としての父や母の偉大さが判つたのだ。貴女の嬉しい今日のリンゴの氣持は良くわかる。」と吾乍らへたな道化ぶりだ。長女の純子さんは九州に居て、今日の間に合はず、四女のナナちやんさしづめ長女の役を兼ねる。ヴァキオリニストのアート君も現れる神經質は直つてゐないが、すつかり大人になつちやつた。天眞爛滿なリリちやんの圓い眼も微笑んで居れば、一番末つ子の一歩君は、お父さんや兄さん以上に背も延びて、今日も不朽洞會の會員達に交つて先程からの奮闘である。

關西の名だたる川柳人も、ぞく〳〵と入場してくる。その中で、「番傘」の巨頭・岸本水府氏が重役のやうな体軀をして御光來。受付子も、さつ

と緊張する。つゞいて、「番傘」にその人あゝと知られてゐる、砂人、文久、「月ごよみ」の芝有など、神戸の御大、椙元紋太氏には三條東洋鬼が附き添ひ、大阪論陣の一方の雄、堀口塊人氏も御入來。開會の正午ともなれば、他社の御大は、柳界でも知られてゐる高弟達を引具しての見事な場所入りに、正直な話が、大會委員達の豫想を裏切つて欣びの水銀は騰る〳〵。

ところで各方面からの祝ひの品が屆けられたその中で、斗士さん贈る、朱塗の角樽は見事であつて、早速、正面横に飾られ、如何にも、路郎先生の喜びさうな、還暦祝にふさわしいものであつた。東京の「日本川柳作家連盟」からの寄書と句箋盆、「月ごよみ」からの短冊掛けなどが僕の眼に止つた位で、他に寄贈の品々も澤山あつたであらうが、その詮索は余りしないことにしやう。僕が貰ふのでないから

窓から見える中座の櫓太鼓ぢやないが、前景氣をどんどこ叩くのはこれ位にするとしても、開會の正午の針がくるりと廻つて一時になつても未だ始まらぬ。ばかりでなく、なほも參會者の跡が絶たないのはどうしたことだらう。既に滿場席なく、ぼち〳〵大會委員達が、嬉しい悲鳴が出やうといふものだ。委員長の中島生々庵博士は例の鼻に皺を寄せて笑ひながら、困つたぞ〳〵と言つてくる。なんだい本當に困つてるのか、喜こんでゐるのか判つたものぢやない。漸やく席題の選者が定まり、締切時間が明示される。芝居で言へばチョン、チョンと柝が入つたところだ。愈々幕が降りてゐる間の見えぬ幕を睨み乍ら席題の句作に、一勢に頭を下げたり上げたり、一應短冊の形をした固い瓷澤な句箋へ愼重な筆がおりる。

路郎先生　種瓜平画

らうものと必死な苦作だ。披講で自分の句が詠み上げられた時の快哉味は、それは斯ういつた大會に出たことのない者には想像できない。

二時三〇分締切り、潮花君の透き通つた聲を合圖に、待機した五名の句箋集めの委員達は會衆の眞中へと飛び込んだ。「ビール〳〵」と翠光君の連呼は景氣が良い。「硝子硝子」と硝子を集めるバタ屋。（これは失禮）「振付け」「昆布」「汗」だくだ。一頻り會場はそ

最早、辨當を食ふ箸の音はなく、時折り咳が聽える位で、創造の惱みに陣痛する。全國より蝟集した柳人達、この交通やら旅行の高價な代價に彼らは何を求めてゐるのだらうか。勿論、川柳壇の偉人路郎先生の還暦祝ひに、あやかることに違ひはなからうが、この古豪、强豪、新人織り交ぜた大會で、知名選者の選に入の爲に騷々しい。司會者の斜水君は紺ボーラの上衣に、きちんとネクタイを締めて行儀正しく、往年の名司會者、後藤青兒氏以上に端麗な面と態度に好意を寄せた者は僕ばかりではあるまい。これから幕は切つて落され、次ぎ〳〵と進行せしめてゆく司會の機略は、最近の新味な文句を挿入し機智と諧謔を交ぜてしたものだ。僕は今日は記者だつた。速記もやらねばならぬから、正面右側の記者席にザラと鉛筆を忘れぬやうに持つてゆかねばならぬ。三時少しまへ、司會者から聲あり「まもなく麻生路郎先生御夫妻が登場されますから、皆さん拍手をもつてお迎へ願ひます。」と。

さあ到來だと、一瞬滿場はシーンとなる。寸刻を入れず南入口に先生らしい聲があり記者席から思はず背のびをすると、花道を通る大統領は、眞紅の花輪を胸に、長い銀髮を亂し、廣い白皙の額に感激の色をみせてさつさと會場を横切られてゐる。後からは賢妻の擧れたかい葭乃女史が草色の簡單なブラウスで、倚り沿ふやうについてこられた。拍手喝采は萬雷の如く、暫くは鳴りもやまない。そこで正面東側に席をとられた路郎御夫妻。

やゝあつて、司會者は、穎原博士が御病氣のため、やむなく欠席されることになつたのを斷り、開會の挨拶のため不朽洞會の理事長、中島博士をさし招く。

博士は先づ主催者を代表しまして、と一應斷り、百里の道を遠しとせず、斯くも多數御光來願つて萬感胸に迫る思ひがする。「川柳雜誌」も御多分に洩れず、終戰以來、經營の困難はあつたが、今日のごとき隆盛に到つたのは皆樣の御支援と同時に、路郎師の川柳に對する情熱が運命的であり、エネルギッシュな努力の賜物である。その壯者をしのぐ足どりで進まれたことは後進の者にとつては滿腔の欣びであつた。昨年六月、先生の文藝賞受賞記念川柳大會の時の御挨拶に、藝術家でも大成する爲には長生きをしなければいけない。長生きをすると共に、よき協力者を得る事だと申されましたが、先生の大成も皆樣の御協力によるものと感謝のほかはない。今後も良いものは良い惡いものは惡いと御叱正を願ふと結ぶ。

その次は不朽洞の洞友、高鷲亜鈍氏から祝辭があつたが記者席から登壇する僕に亜鈍

大阪そごう

そごう卸商品館
十合商事株式會社
西區土佐堀一丁目

そごう梅田食品市場
大阪車東隣

そごうアベノ店
上町線終点南

そごう難波店
地下堂ナンバ駅上階

そごう更生デポー
大阪駅前

を紹介する苦勞は少しもない亞鈍の喋つたことは、誰よりも僕が知つてゐる。更めて僕は言ふ。路郎先生の還暦を祝ふことは、川柳を語る以外にない。先生の六十一年間の大半は川柳に生きられたからだ。さて先生の川柳の立場は久良伎、劍花坊のあとを受けて、明治大正昭和を通じて、川柳のロマンチシズムを打ち建てられた事に意義がある。それは先生が詩を解し、詩人であつたからだと、ぼつ〳〵亞鈍の川柳理論が始まつたが、これはどこまでも亞鈍の畠から出た路郎觀で、それには當日集まられた皆樣には大いに異議があつたであらうと考へる故に、別に誌上で討論することにしやう。二に、路郎先生と「川柳雜誌」の一体であること雜誌の刊行に泪ぐましい程の奮闘ぶりを述べ、三に、選者としての柳界第一人者である所以を說き、最後に、川柳職業人として、日本にたつた一人の川柳家である。それは川柳のたつた一人の玄人であつた。と絶叫した—つもりで私はゐる。

記者席に歸つた僕の昂奮がやまぬうちに、プログラムは進行する。東京に於ける路郎門下の高弟、福田山雨樓氏の祝辭は、西尾栞君が代讀する「番傘」の川柳定義に一等當籤の山雨樓氏の顏をみたい人達も居られただらうが、折惡しく宿痾のために出られなかつたのは、本人も殘念であつただらうと思ふ。(別稿參照)

こゝで全國各地からの祝電を發表するだけで、十分以上かゝる大變な數。司會者もこの邊で場馴れしてき、油が乘つてくれば、會場も高潮してくる。

これから紀念品の贈呈があります。と司會者の聲に路郎先生は椅子を立たれる。路郎師、元氣一杯、颯爽として登壇、と司會者の名アナウンスにつり込まれるやうに先生はたつたつと歩を中央に運ばれる不朽洞會理事長より紀念品が渡される。拍手、拍手、拍手。一旦席にもどられる先生の後に、來賓の祝辭が次ぎ〳〵と十數名、入り代り立ち代り、正直な話が、速記も疲れたが、會衆もちよつとうんざりしたのではなかつたか。僕はしかし刻明に記錄をして置いたが、再び竝べたてゝ、讀者の退窟を誘ふ愚を敢てしたくはない。僕はその二、三の祝辭を拾つて來賓諸家の代表としたい。

然し、劈頭岸本水府氏の祝辭は絕對に聽きのがせないものがあつた。述べる人、述べられる人の柳界の兩巨頭の青年の頃の美しい友情は、はしなくも公開されたのであつた大体の要旨を左に書きつゞらう。

岸本水府—本日は麻生君の還暦の御祝である。私は何を措いてもお祝に出かけねばならなかつた。來賓として最初にお祝を述べさして戴くことは光榮であります。六十一才は暦では一に還へるといふことですが、先程の祝辭にもありました通りに、川柳界に人材が乏しい時にあつて、麻生君の存在は唯一のものであり、それは川柳界の御祝でなく廣く文壇の御祝である。けふは私の川柳入門當時の日記を讀まして戴きたい。明治四十四年、私が二十才で、路郎君は二十四才の時の日記で、路郎氏と私につながるえにしといふだけでなく、川柳壇の上からみても面白い話だと思ひます。さきに路郎君にも斷り發表するお許しを得ましたが、今皆さんのお許しも得て、こゝに讀み上げさしてもらひます。

冒頭以上の通りに述べて、明治四十四年三月十一日から四月、五月、六月、八月の十五日路郎先生の東京に出られる日、驛で送る筈の水府氏が路郎先生に逢へなかつた。翌日、青明氏から、確かに路郎君がその日に大阪驛を發つた事を知つた。もし路郎君が、あの日水府が送つてくれなかつたと憤つても、この通り日記が證據で、私はたしかに驛に行つた。裁判所でも日記は何よりの有力な證據物件として認めてゐますから、と會衆を笑はせる。水府氏の日記を通した交友は、路郎先生の東京行まで續けられ、そこで終つてゐるが、若かりし頃の兩巨頭が、四月などは十七回も、互に往つたり來たりして徹夜で作句し、喋り、更科でそばを喰ひ、吉兆で飲み、惡醉ひしたりしながらも、川柳を作り雜誌の計畫をたてたりしてゐる、ひたむきな青年の情熱を僕は尊いものと考へる。あとで栞君が、よく二人は逢つたものだ。時代がよかつたからだね。今だつたら戀人に逢ひたくても月に一回も逢へるかどうか、と述懷したが、これは皮肉でなく、呑んだり、食つたりし易い四十年前のことであつても實際に戀人以上の交りがあつたことを吾々は知らう。水府氏の日記公開が起因したとばかり言へないが、會の空氣は、たしかに和かになつて來た。水府氏のあとを受けて神戸の論客、三條東洋鬼氏登壇、

三條東洋鬼——本日、麻生路郎先生の還暦祝賀會に出席できて非常に感激して居ります。川柳の中心は東京を離れて大阪にあることをこの會に出まして見ました。そして不朽洞を、公、私共にリードしてゆく偉大な力を思ひ、路郎氏が身をもつて川柳につくされた方として柳界の第一人者である。若い時は余り御健康の方でなかつたと伺つてゐますが、川柳に對する熱には敬意を表します。私は路郎氏の年齡とは凡そ半分位で、直接の門下ではありませんが、川柳は絕へず路郎氏に負ふものがあり、漫画川柳華かなりし頃、川柳をやつてゐることを恥づかしく思つて、隱してゐましたが、今では堂々と川柳をやつてゐるといふことが言へるやうになりました。私はまだ、家庭の者にまで川柳を普及してゐませんが、麻生路郎氏の一家には全員ゆきわたり、わけても二男のアート君はよき後繼者であります。

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に…
ノルモザン錠
45錠入
大阪・武田藥品工業株式會社

清談・商談・お待合せに
喫茶 みどり
みどりでの商談
運が向いて來る
上六交叉點西北角

伴奏をやめて、誌上司會を急ぐことにしやう。

近江砂人――本日は衷心からお欣びしたい。本日紀念に私のいただいた路郎先生の短冊に「六十一まだ情熱は燃えに燃え」とありますが、これは青年の意志と熱をもつた肉体で還暦をお迎へされた事をお祝ひ申します。戰爭後の混亂は一般の現象として、藝術上にもありますが、川柳界に於ても、無秩序であります。この時路郎氏の負ふところは實に多いと思ひます引きつゞき、古稀、米壽の御祝ひに、私も臨席さしていただきたいと願つてゐます。

藤村雅光――私は川柳人ではないが、川柳家として麻生路郎氏は大阪に於けるもつとも尊敬できる先輩であり、藝術家であります。麻生氏が國會議員の選擧に出られ、私は後援をしましたが、當選しなかつたことは、ある意味でよかつたと思ひます。國會へ麻生氏を送るには理由もあつた事ではあるが、別に麻生氏には大きな仕事があつた。それは大阪に於ける文化的な大きな問題があるからです。川柳の主体性は現實に大阪にあり大阪の文化は東京に引きづられるやうではいけない。私は大阪で竹中郁、安西冬衛、小野十三郎等の詩人と共に、關西の詩壇の主体性をもたうと、最近運動を勃してゐますが、皆様に於かれても、大阪に麻生、岸本兩大家をもつて、川柳の主体性を獲得して欲しいと思ひます。

椙元紋太――甚だ生意氣なことを申すやうですが、私が麻生氏の還暦に出て祝辭を述べることは三十年前には思つてもゐなかつた。その頃、十五人の集りがあれば、神戸では神戸だけの人しか寄らなかつたが、その頃と比較しますと川柳も大きくなつてきたと思ひます。川柳がどれだけ擴がつたかといふ例は澤山ありますが、その一つに、私が夜更け、お巡りさんにとがめられて、身体檢査を受け、ポケットから手帖が出ました。檢査をする人はその手帖から私の句をみて、これは川柳だねと言ひましたが、その一等終りのところの私の名前をみて何と讀むかと、言ふから、スギモト、モンタですと答へましたが、内心、川柳を知つてゐる者が自分の名前を知らないのかと、不滿に思つたのですが、その樣に、私達の知らないところ、氣づかないところで川柳はのびてゆき、まだ〳〵川柳自体が大きくなつてゆくと思ひました。

殊に川柳界が世の中に出たといふことは「川柳雜誌」が出てから以來のことであると思つてゐます。つまり路郎氏が活動されてからだと思ひ、自分の身につまされて考へましても路郎氏に負ふところ大であります。

紋太氏の來賓最後の祝辭要旨は以上であるが、何れも大家中堅の一言居士だけに、御座なりの祝辭と違つて、路郎先生を種にした立派な講演競技會であつた。そして一樣に路郎先生の川柳に對する偉業をたゝへ、六十一の老青年を鞭撻鼓舞すること大。これでは先生の腰の曲りやうがない愈々世紀の聲をマイクはキヤツチする。プログラムを追ふと謝辭、麻生路郎とある。

麻生路郎――どうもありがたう御座いました。私が一番へたな事は挨拶で、そのうち御禮をいふことが一番拙い。心から私は一人一人にありがたいと思つてゐるのですがかうして卓子を前にたつと、つひそり返つて話したくなり、私がさて喋るとなると、これは得意で飯時でも、茶碗を何遍出したか判らない程に喋りつゞけるんですがもつともこの自信は川柳をやるやうになつてからだと思ひます。

私は大阪商大の前身、高商時代にそこを出ましたが、學生時代に羞しがり屋で人の前に出ても、ものが言へないやうではいかんと、學校演劇で、シエクスピアの芝居を英語のまゝでやつたりしたものです。今日は私の誰にも話した事のない生立を言ひませう。私の生れは尾道で、母親は六十年前、亡くなつた、私の生れた翌年に亡くなつたんだから、自分の年齡を覺えてゐる限り、忘れやうがありません、それから向ひの島へ里子にやられ、大變可愛がられて、是非、家に呉れといはれたが、父親が、頑としてやらなかつたさうです。そして私は大阪で商業學校を卒へ東京へ出た。さあそれから會社員を振出しに、官吏の端くれもやつたし、學者、新聞記者、病院事務長、喫茶店、古本屋、等々二十幾種類の仕事をやりましたが、終始一貫してやつてきたのは川柳だ。

かつて、某市の病院の事務長をやつたことがありますが、院長に見込まれて、「川柳をやめて」事務長一本になつてくれと言はれたが川柳をやめる位なら事務長をお斷りすると頑張つて、結局、事務長をしても川柳はやめなかつた。院長は私と同年輩で、なか〳〵勇敢で、頑固であとに引かない人でしたが、それで通つてきた。さき程水府君の日記の中にあつたか、どうか知りませんが、水府君と二人でその昔、神戸の姉のところへ立寄つた時に、若い二人を前にして姉から、若いのに川柳をやつたりしてはいけない、そんなことは老人になつてからやれと叱られたことがありましたが、然し私は老

頴原博士から

――御挨拶――

本日は、麻生主幹の還暦祝賀の大會が催されまして、我が日本文壇の爲に、まことに慶賀に堪へません。私は慶賀の一端として、何かお話をする樣に御約束をいたしておいたのですが、生憎病氣の爲出席が出來ませず、まことに殘念の次第です。實は、お話すべき内容の原稿丈けでも、執筆致したいと、思つてゐたのですが、唯今の狀態では、それも一すむつかしくかうして代筆の御挨拶だけにとゞめねばならなくなつたことは、返す〳〵殘念です。しかし麻生主幹が殆ど一生をかけて、つくした仕事が、本日、この樣な祝賀の形でこゝにかゞやかしい成果を示してゐることは、それ丈けで、もうこれはどんな講演にもまさる見事さだと存じます。その意味で、私の講演が本日行へなかつた事などは大した事ではありません。唯、私は次の樣な一言だけを御挨拶の意味で、是に申上げておきたいと思ひます。人は川柳を滑稽文學と思つてゐます。又喜劇はつねに悲劇皆樣に於かれても、大阪に麻生、岸本兩大家をもつて、川柳の主体性を獲得して欲しい創る原動力となつてゐるのです。この事は、日本文學に於ける滑稽性の非常に大きな且深い意義を示して居るとおもひます。實は私はその意義をいさゝか闡明したいと思つてゐる次第です。さうして、現代川柳がやはりその深い意義を發揮すべきものだと信じてゐます。このお話は出來ませんでしたが、「川柳雜誌」で、それは既に實踐されつゝあるところです。こゝに、つゝしんで、麻生主幹の還暦のお祝を申上げると共に、「川柳雜誌」が日本文學の新しい展開へます〳〵大きな寄與をすべきことをいのります。

昭和二十三年七月十一日

頴原退藏

近作柳樽

襟替が迫るダラリへ未練もち　上野市辰子

ドロ〳〵に酔ふ妓を車夫は助けて乘せ　同

あかし花たいこもまじる花札をひき　同

ほろよいの裾に色氣を持つ年増　同

コップ酒棒を張りたい妓と一座　同

しめし合ひ嵐をついて行く蛇の目　同

朝がへり深いねむりの花街を脱け　同

調伏へ女將は女將らしい智慧　同

ぶぶづけを通すおちよぼへ午前二時　同

賣笑婦に女醫は冷たく針を射し　岡山縣弓削平

百圓の肴は箸の先で喰べ　同

役得のことなど言はずストの辯　同

惡食はもう食道樂のものでなし　同

貧しいがおしめ並べて乾せる幸　同

强盜の眞似して妻に叩かれる　同

腹に卷く米は冷たいものと知り　同

たけのこでもう虫干の世話もなく　石川縣茶撫朗

電柱の陰も拾ふてゆく暑さ　同

北陸大震災（六月二十八日十七時十四分）

來るものが來たぞとばかり地震の搖れ　同

これでもかこれでもかとて搖り返し　同

庭に寢てわが家を怖いものに見る　同

慌て者でないのを妻に叱られる　同

太陽に叛く仕草を署に引かれ　小松市茶佛

再會の神父は花に取りまかれ　同

相談は飲んで歸つてけりがつき　同

万と言ふ金に淋しく見てかへり　同

裏街へ越して妾の多いこと　同

起された用事はガスが出てゐます　大阪市千舟

子にまさか戀愛結婚とは云へず　同

我ながら執念深く籤を買ひ　同

圖書館に勤めてゐます近視眼　同

買出しについて行きたい子を叱り　同

落穗〳〵雀に拾ひ負けまいぞ　愛媛縣旭童

美しく死ねさうな水山の池　同

櫻ン坊乙女の肌といふ光　同

グンと伸びたは松の綠だけ　同

不吉な豫感へ村は夕燒　同

金を持ち釦それ〴〵部署に就き　今治市文庫

葉の葉がトンボの重み支け動き　同

一同の寸志汚ない紙幣ばかり　同

尻尾ふる犬にも似たる小あきんど　同

何事も共に結びつける父　同

買出しを哀れむだけの幸福さ　岡山縣七面山

氣の弱さいらぬ苦勞を買つて出る　同

美談の子今日は闇屋で署長會ひ　同

スクリーン一杯のキッスに聲なし　同

貧乏え逆らうやうに子供出來　同

儲け口女房は貞女ならざりき　鳥取市日滿子

投げキッス娘大膽にも受けた　同

それ程に釣れた鮎なら持つて來い　同

夫婦喧嘩女も派手にやりました　同

おだてあげてやれとは凄い社交術　同

出す事で無くて良かつた保護者會　今治市一風

入口と出口港の萬華鏡　同

夢に見たこれが祖國か港の灯　同

妾宅の寢込みへ名刺を出して見せ　同

同權の世も御覽じろ佛さま神　戸鐵三

人になつてはホントの戀は出來ない。僕は川柳もそれと一緒だと言つて開かなかつたことがあります。

先程から皆樣から過褒されましたので、こゝにじつとして居れん氣持がして居りますが、これからも私が、大きな声を出してもまあ〳〵子供たからと思つて御勘辨願ひたい。こゝで私の持論を一つ申し上げると私は世の中の規則をどん〳〵削つて欲しい、右側を歩いたらいかんとか、街路で小便したらいかんなんて、そんなものを全部外したら世の中が生き〳〵する。そんな規則が出來ると、それを守らすために交通巡査が多勢要る。規則がなければ違反者は出ない。規則がある以上、取締る人もゐる。取締る人がゐなければ危險防止は各自でやる。そんなものに對する費用の莫大を思ふと莫迦らしいことである。淀屋橋の交通整理、あれを喜んだり、寫眞をとつたりしてゐる。裏口營業は表口をしめるから裏口が出來る（笑声）心齋橋を歩いてゐる人に小便してゐる人は何處にも居らん。なるほど小便をしたい人はある。けれどもそれは、それ〴〵適当な處置をとるものである。取締るなら先づ便所をつくることである。この間も新聞を讀んでゐると、踏切の遮斷機を下すのを忘れたために人が轢かれた。踏切に遮斷機があるから轢かれるので、むしろない方がいゝのだ。お互に生命が大事なのだから遮斷機がなければ、各人が注意することになる。こんな話は街路だけの問題を論じてゐるのではない。

私は句を添削しない。自分で踏切へ出たら、右をむくやうにしたい。けふも規則でこの大會に諸君を招いたのではありません。けふの大會は私は主賓と云ふ訳で、不朽洞會の者達で相談仕合つてやつてくれたのですが、それでいゝのだと思つてゐる。これからも若い人達がどん〳〵やつて戴きたい。コセ〳〵した規則は要らぬ、然し自由主義を履き違へないやうにして欲しい。けふから赤ちやんになつたので、少々はむづかつてもいゝと思うので云ひたいことを云はして貰ひました。（拍手）——

世紀の声はこれで終る。還暦を祝ふ人、祝はれる人のお喋りは盡きないにしても、少し型變りの祝賀會になつてしまつた。實もあり果もある、これらの内容は一日を大阪で、たか〳〵四百人位の柳人だけが知つたのでなく、これは記錄にとゞめて、長く、あまれく、柳界に知らしめる必要があると僕は考へる。それ故に僕は懸命に書きつゞる。

さてこれからお待ちかねの披講が始まる。兼題のトップを橋本綠雨選の内助から、矢ぎ〳〵と選者各々の名句調で佳吟が朗詠されてゆく、白扇の波が會衆の昂奮と、当、落の悲喜劇を煽り出してゐる兼題七番目の奥村丹路選の「生命」を最後に、休憩五分間、つゞいて席題のトップを、あとの諸大家の選者を尻目に、男女同權をふりかざしながら、脇田梅子女史が勇敢に飛び出す。大阪にも珍しい歯切れの良い言葉。又斯ういつた女性のタイプは關西文化の紅一点として誇りたい。柳暦何十年の方々だけあつて、席題の披講ぶりの堂々さは流石に、爭そへぬ。伊志田孝三郎氏の「振付一の身ぶり、しぶり交りの選は席題にぴつたり欲を「ガラス」の選者、堀口塊人氏を知らぬ柳人は居らないだらう。そ

女房の毘笑はれぬ暮し向き　同
十六七甘えられても親困り　同
下手な散髪中止も出來ず　高槻市丁　路
見えぬ目を見張り一席政治論　同
心ならずも鼻垂れ小僧褒めるなり　同
まごころの愛で僕から逃げよとす　貝塚市一　郎
諦めます言ふを叱つて強く抱く　同
裏口は酒亂の客にはらはらし　同
古着屋とまごふ獨身者の部屋　宇部市栗　美
竹抱けば昨年の夢のかすかなる　同
復興市場飯食ふ處ありはあり　同
鐘のない鐘樓が淋し和尚さん　津山市白柳子
アカハタをそつと和尚さん讀んでいる　同
和尚さん衣まくれば腕時計　同
クリームの淡さ匂はせ處女でゐる　大阪市小雅子
いつのれるバスか配給程に待ち　同
折鞄闇で儲けた艶をもち　同
トランクのタオルも濡れて旅せゐし　大阪市のぶを
貸ボートスカートの丈氣にかかり　同
共稼ぎしてまんねんとクラス會　同
ガツテリと細君が居るお人好し　茨城縣舞　扇
卒業の字が履歴書へ恥しい　同
空想の中で彼女を組み立てる　同
老母ただ變れば變る世におされ　石川縣義　風
母の里米を作つてよいところ　同

二十年前をしのびて

思ひ出の大阪市街地圖が古り　同
麻の蚊帳過分が泌みて寢つかれず　新居濱紋　々
ももぐつて蚊帳をおしこむほど慌て　同
初夏の蚊をあなどり蚊帳を立つて出る　同
宴すゝみ校長やはり踊る人　態　本室　久
麥打ちの人なぐさみの樣に見え　同
長谷川へ百圓すてる人の列　同
裏切つたひとの形見を憎う見る　大阪市定　美
自由ですと娘涼しい顔になり　同
愛人と思うただけよそれだけよ　同
何日からか夫のうそを聞き馴れて　山梨縣曄　子
爪を切る處女の姿の懐かしく　同
長女まだ長女としての夢を抱き　同
未亡人女の子にはあまくゐる　松本市汗　青
あんな氣がほしい救世軍うたふ　同
蘚診器世にすがりつく瞳をとじる　同
今の娘の知るや知らずや襷がけ　秋田市夕　帆
この町も終戰以來美容院　同
お勝手へ御無心鹽を一つまみ　同
ピツケルも錆びて長女は嫁にゆき　兵庫縣花　子
十疊にころべばあまい木の匂ひ　同
麥刈へ大阪からの客があり　神戸市美代子
丁寧な手紙に女恐れ入り　同
まづしさに働くだけで戀もなく　大阪市梅　風
オチョクツテいるよに雀おりてくる　同
年頃を過ぎし娘を一人もち　兵庫縣柳　風
名門の墓今は詣する人もなく　同
どいたとも云はず驛員水を打ち　大阪市正　則
正直に暮らして居ますドブさらひ　同
ひたむきな乙女涙の一歩まへ　島根縣米　市
商法はおつりよろしの値をつける　同
娘さんそれ見たことか捨てられて　大阪市ひさみ

あざみ句会復活

復活の聲々々が雲を突く　同
ベレー帽冗談らしくかむつてゐ　今治市滋　路
巡禮の過去ありそうな後ろつき　同
横向いて驛へ着くまで横向いた女　今治市國　彦
繪日傘がスツトかくれる仁王門　同

の名調子と良心的な選句態度を。重厚な紋太氏の人生觀をして、「ビール」の句を何とみる。この人の持つ人間味溢れる声調には、何かしら泪ぐみたくなる宗教的な武者小路實篤の句がある。席題の最後は岸本水府氏の「汗」だ。水府氏の四つ玉の妙な眼鏡は氣にかゝるが、路郎師と同じ銀髪を綺麗にわけて、堂々たる恰幅、既に水府を言はなくつても大家の風貌はある。〃アルバイト少女の汗は美しく〃無名の作家の句を氏は最後に詠みあげられた。會衆一同は、はつとする。作者野介とは何處の誰だ。句を拔いた人と拔かれた者の對比が意外であつたからだ。拍手のうちに賞品を受ける天賞の野介氏は長身痩驅、はたして誰も知らぬ面であつた。白皙に、度のきつい眼鏡を光らして、中央の席を起つた。

さて最後の最後、これまで全沒であらうと、これだけはと期待をもつて、長い時間を待つてゐた會衆の前へ廳生路郎先生は特別兼題「還暦」を引つさげて、やをら登壇、相当澤山頂戴しました、と前置して、書き拔いた紙をさつと擴げる。卷紙のやうに長い。占めた俺のものもおなさけに採つて貰へさうだぞ、と思つたが、なか〳〵先生の嚴選は私情を挾んでくれない。矢張り、良い句は良いし、さすがに古くから親しんでゐる作家の句と名前が詠みあげられる。入選句には副賞に「月ごよみ」社寄贈の短册揮毫を貰ふ果報者の顔がみたい。これで当日の披講は兼題、席題ともに全部終つた。

武部香林君は特別講演を約束されてゐた頭原退藏先生の書簡を代讀し(別掲)、そのまゝ閉會の辭があつた。大會を通じて、種瓜平岡伯が出張され、似顔繪や、漫画の揮毫あり、會場内に、菓子やら飴やら、煙草まで買へる賣店が出たといふ、そのことを知るだけでも盛會の程が知れやう。

いつの程か窓外を細く靜かに降つてゐた雨もやんで街路は大會を了へて出る人達の脚を迎へる。その脚は南北に向へば心齋橋筋、戎橋、東西に出れば道頓堀筋で、大阪の芝居小屋は中座、角座、浪花座、朝日座、辨天座の五座がある映画を觀たければ松竹座は、直ぐ出たところの戎橋の袂にある。一般會衆はさうして退き、散り〴〵ばら〳〵。大會役員並びに、当日の選者、有志は殘つて記念撮影、それから卓子を圍んで、竹莊君自慢の腕前による御馳走に、一獻さし交す。サンマータイムに油斷すな。日が暮れかゝるとみると、もう九時だ。テーブルスピーチで氣焔をあげる御酒に弱い亜鈍は仕方のない男だ。八歩君の出雲節、鮎美君の「夕暮」はともに上手な節廻しと綺麗な声で、遠來の客や、來賓を歎待した。自己紹介に、それ〳〵隱し藝が出たが、とつぷり日も暮れ、折惡しく、停電で、互ひの顔も定かでない。生々庵、うどん屋ではありません。これは博士自身の自己紹介の言葉)その生々庵居士から散會の宣言が下され、僕は早くも醉つぱらつて丹路君に助けられて出る。よかつた〳〵。さあこの大會記はたいした記錄だぞと、鞄に入れた三十枚のザラ紙がちら〳〵醉つた頭に引つかゝる夜の大阪は良い。赤い灯も青い灯も復活した。そして吾々の川柳も路郎先生還暦を期に、今日、只今から復興するのだ。川柳ネツサンスの曉鐘が僕の耳にガン〳〵鳴つてゐた。(了)

耳搔きへまかせきつてる母の膝　鹿児島痴草
しとやかさヒスとは別な聲を持ち　〃　同
此の靴でダンスホールに行けるかい　大阪市柳太郎
指定席隣も前も二人連れ　同
看護婦二人眞直ぐに來て花を買ひ　岡山縣北星
映寫始まれば手製のパンを食ひ　同
酒好きの父でした借はあつたけど　大阪市良子
密月の旅行の金が米になり　同
薫風にダンサーかスカートなびかせて　大阪市葉茱子
春がすみ夢見る樣に今日も暮れ　同
ハーモニカ吹けるが勤めぐれて居る　岐阜市周峯
古くさい言葉でほめて子が笑ひ　同
人生に疲れてる足老巡査　金澤市冬思夫
巡査ある日小さな不平言ふてゐる　同
署名運動女あんまり書きに來ず　岐阜市巷歩
麻雀とダンス覺えて子が歸省　同
ミスボリスボリボックスで戀を知り　尼崎市愚默
心理學精神學とて變になり　同
インフレへもう乳母車も購ふどこか　新居濱默紅
畦を塗る手付つぼくらちらと見る　同
終電車みんな景氣のよい話　大阪府きはち
朝起きの癖も淋しく失職し　同
氣樂ですとは落第氣が強い　島根縣米市
炊煙の風景旅をなぐさめる　同
出雲屋で拜んだ頃の夏祭　大阪市梅里
夏祭灯のない船場島の内　同
裏口の儲見ぬいた稅でした　愛媛縣草石
戰災地ぽつんと殘る屋根の苔　同
追放の何をか云はん世の姿　愛媛縣椋人
食えぬ事云はずみ佛に仕える身　同
ギターとは悲しい戀の音ばかり　大阪市草々
その後は祕書にまかした煙草の輪　同
勞組を牛耳り社長に負けぬ髭　長野縣柳兒
水溫む子等へ釣竿うるさがり　同
スト決行しかも値上をした其の日　奈良縣美朝
母病む
インフレの話をさける枕もと　同
約束の返事は輕し好きな人　愛媛縣早百合
カルメラの理屈ばかりでふくらます　豊中市柳堂
朝寢して旗も出さない祝祭日　京都市春渉
復員と云ふ言葉なく馬想ふ　香川縣安哲
地下足袋で歸省の靴をうとく見る　愛知縣吐平
サンマータイム電氣とはけた樣につゝ　愛媛縣健水
配給所待たせた事は論の外　今治市松花
値が變りましたと齒醫者まけもせず　米澤市亂聲
恙なく歸りし伯友の髮白く　池田市木聲
こゝからが入智慧で書く無心狀　名古屋鳳石
靴肩にのせてせゝらぎ渡り切り　大阪市實
今日からは三人になる灯がともり　茨木市狸村
婦長來た聲にベットへもぐりこみ　大阪府美智子
病院のこゝではみんな民主主義　大阪府君子
紅ばらの樣な唇とげもあり　大阪市麟之助
雜談も超過勤務に計上し　大阪市康夫
仲直りさせる年だと注意され　大阪市三郎
金策に妻も一役買つて出る　松江市快哉
糞度胸据えて玉葱むく背廣　奈良縣つとむ
靴磨き見逃す靴のやつれよう　下松市白星
闇してる證據の藏がたちにけり　岡山縣笑泉
口喧嘩女同志と思はれず　松江市風子
あしらわれているなと思ふ意地を張り　愛媛縣旭童
まゝごとまでがお粥と云つて居る　同辰雄
要談を云ひそびれてる女客　大阪市拙朗
姑は嫁の三倍も生きてゐる　呉市甦光
藤棚へセルの着物がよく似合　和歌山惠風
葉櫻の香頭上に夏が近づけり　大阪市桃村
共學へ敎師の方が妬けて來る　大阪市晴夫

世・相・柳・眼

木下幽王

丹精して作つてゐた菜園のマツカ瓜を猫がむしやくしやと食つてしまつた。全く前代未聞の出來事なので早速猫を捕まへて詰問した處近頃の人間ばやれカルシユームだのへちまだのと、ろくに骨も拾てて呉れないので、私だつてたまにはビタミンCを摂りますよと答へた。

○

「近頃の若い者は何故こんなに子供つぽく甘つたるいんだろうね」「何、配給の砂糖ばかり食つてるからだよ」

○

風呂賃が十圓に騰つたとたんに婦人連が女の髮洗を只にせよと云ふ運動が起つた。そしたら尼さんが割引運動を始めた。世の男性方よ負てはならないぞ。

○

「君んとこ子供が出來たんだつてね、おめでたう」「何をこの野郎ヒツぱたくぞ。今度で八人目だよ」

生產過剩は赤ん坊ばかりなり　（幽王）

○

「ネエ、うちの伜はなぜ集團强盜になぞ加つたのでせうね」「そりや僕達が集團見合で結婚したからなー」

○

水道がさつぱり出ない。消防署が万一の用意に水を蓄て置けと注意した、とたんに日本腦炎の流行で「水たまりをなくしませう」と呼かけた。

○

「近頃電車に乘るととても疲れるんだよ」「だつて大分樂になつたぢやないか」「うんそれで、もたれる處がなくなつてれ」

○

「オイ、そんな所で小便をしちやイカン輕犯法に抵觸するゾ」「あのー一里程こらえて來たんですが、どこにも公衆便所がないもんですから—」

巡査の若さについ本心を　（幽王）

○

「君は雨の日には必ず缺勤するね」「うん雨漏をうけるのに大童なんだ」

雨の日ははく靴がなく本を讀み　（白柳子）

○

いのち賣り度し。
たんす、ミシン付
但結納五萬以上
早ィが勝
廿八の賣殘り處女

○

「某博士の說によると、馬や犬は齒など磨かないから、人間だつて磨く必要はないと云つてるよ」「だつて馬や犬はキツスはしないからね」

○

「君は勤務時間中に何をしとるか」「はー原稿を書いてるのですが」「それはけしからん……」「だつて社長、昨日稅務署が來るかも知れんから出來るだけ暇そうにせよと云つたぢやありませんか」「うんよろしい、君は今月から昇給だ」

川柳漫釋

漫筆は動く（三）

小畑自由朗

ひよろ〳〵と參万円の牛歩む 宵明

「おい、牛が倒れてしまひさうや、早ようつゝ張り棒を持つてこい」

「まあ〳〵、どないしまひよ昨日參万円も出して買うたとこやおまへんかいな」

「もう貳万円はりこんどきあこんなことありやせんのにお前がけち〳〵するさかいにや」

「せやかてあんた」

「女さかしゆうして牛買ひ損こねるとはこのこつちや、うだ〳〵云わんと早うつゝ張り棒を持つて來い、呀ッあぶない、どだいもう此の牛吹きさらしの中についたて立てゝる樣なもんで、あぶのうて見て居られんわ」

羽根をつく　千舟

病人の氣に障り

「うるせいな正月早々、どこのど奴や間抜けた音をさしやあがつて釘を打つてけつかるのは」

「あほらしい、何云うてはんね、あれは釘を打つてはんねやおまへん、横町のお醫者はんとこのいとはんが羽根をついて遊んでゐるのだすがな」

「あほう奴が、此の時節に、昔風なことをさらして、此のわしのたかが知れたリョウマチ位ひをようなほさん醫者も醫者なら娘も娘や、あッ、又痛みかけやがつたあゝうるさい、あいつらにもつとあつちいいて羽根をつきさらせと云うて來いそれからついでに、あの籔醫者に、もつとようきく注射を持つて早う來いと云うてこい」

開業を案じた恩師顔を出し 史葉

「どうぢやね、だいぶ患者が詰めかけとる樣ぢやが」

「はあ、おかげさまで」

「結構々々、而し、君、顏色があまりすぐれん樣ぢやがどうかしたのかね」

「は、實は昨日愚妻の子宮を手術致しまして」

「馬鹿、君の其の腕前で肉身の者を手術する奴があるかい」

子を連れて出ても好い娘眼は流れ 小松園

「あんたッ、背の坊やが半分ブリ落ちよりまつせ」

「……」

「あんた」

「わかつとる」

「どつち向いてなはんねや」

「うるさいな、あの娘、どつかで見たことあんねやが」

「何云うてはんね、うちには一番おなじみの家のいとはんだつせ」

「あゝ、あのけちんぼう質屋の小娘か、而しべつぴんやなあ」

謠初め妻も眞面目に聞いてくれ 翠光

「謠初めやと思うて、今日はついにない、お前神妙にきいて居てくれたんやな」

「へい、今日はまたついにないあんたが高砂を謠ひなはつたもんだつさかいに」

「ほう、お前高砂すきやつたんか」

「いえ、別に好きやおまへんねやけどつい、三十年前のあの時を思ひ出しましてな」

同居する若者と論して見たく 山雨樓

「おい、お若いの、二階の大將」

「はあ」

「お茶を入れたから下りて來給へ」

「はあ、有がとう、ゐただきます」

「ところうで、君等若い者はすぐマルクスを云々しよるがぢや」

「はあ」

「一体全体あの樣な過激極る思想がぢやね」

「はあ」

「此の日本にぢや」

「はあ、而し小父さん」

「まあきけ」

「でも小父さん、あなた、資本論をお讀みになりましたか」

「あんな不淨なもんは讀んどらん」

「ぢや議論は止しませうや」

年の暮茶碗を投げたらしい音 豆秋

「おや、又隣が始めよつたな」

「毎年年の暮れにはきまつとりますな」

「おや、投げよつた」

「今年は茶碗らしゆおましたな」

「去年は茶びんやつたな」

「へい、一昨年はたしか、金だらひだした」

「おや、又やりよつたぞ」

繪双六名和ゐ兒島も忘れられ 久留美

「此の双六に無茶なことしよるさむらひの繪がかいてあるわ」

「どれ」

「ほら」

「あゝほんに、櫻の木の皮むいて樂書しよるがな」

「なんちゆうさむらひや」

「コジマタカノリ」

寶くじ外れて榊も枯れてゐる 千舟

「あんた、歸えりに花屋へ寄つて榊買うて來ておくんなはれ」

「あほう、あれ程拜ませておきやがつて、寶くじの一番はしくれも當てゝくれやがらん樣な貧乏神に榊もへつたくれもあるもんかい佛はんのしきびの古手でもたてといたれ」

麻生路郎著　水武書房版

最新刊

川柳を研究したい人にも指導する人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものか」から說き起して收むるところ三十七講、平明で親切で、初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを會得することが出來る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好參考書であることは刊行前既に注文の殺到してゐたのに見ても明らかであらう。敢て一讀を薦む。

B6版　二一二頁　定價　八五円　送費　金三〇圓

取次御注文は　大阪市住吉區万代西五丁目二五番地　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雜誌社

アメリカの駆虫薬

十二指腸虫　蛔虫　腸内寄生虫

コメット

アメリカ藥局方・四塩化エチレン

テトレン球（新発賣）

黒田製藥株式会社　大阪　東京

續川柳講座（17）

麻生路郎

川柳を表現する語彙に就いて

川柳は俳句や短歌と違つて平言や俗語で創作するならはしになつて居ります。それは昔も今も同じであります。しかし昔の平言や俗語が、その儘今の平言や俗語でないことは云ふまでもありますまい。建て前としては平言や俗語で作句をするのでありますが、平言俗語以外に、雅言や術語や漢語や外語外來語さへも自由に驅使することを許されてゐるのであります。要は如何にそれ等の語を適正に消化して行くかにかかつてゐるのであります。しかし、外語外來語に就ては裏に縷述しましたので、こゝでは平言俗語で構成される川柳を一段と飛躍させるために使用された雅言（古語）、俗語、術語、漢語等の語彙を使用した句に就て少しく述べて見やうと思ひます

（一）雅言を用ひた句

雅言（古言）を用ひた句は古句にもありますが、今人の句では

學習院同じ机にゐらせられ　（弧柳）

正直であれ親鸞がみそなはす　（松郎）

義足へは天皇お眼を伏せ給ひ　（路郎）

子にしかめやもと思いつ腹がたち　（塊人）

王の座にましますメロン實れ殘り　（柳川亭）

などの「ゐらせられ」「みそなはす」「伏せ給ひ」「まします」「しかめやも」が、それであります。これ等の雅言は平言の中に混用されることによつて句意を、より嚴肅にしたり、皮肉やユーモア味を強調したりする役目を果して居ります。しかも、それ等の混用が少しの目障りにもならないし木に竹をついだやうな感じのおこらぬのも、川柳に與えられたよさの一つに數へることが出來ると思ひます。

（二）俗語を用ひた句

句を構成するのに俗語が用ひられてゐることは、既に御承知のことと思ひますが、平言で綴られた句中に、俗語を混用して一句を成す場合に、その俗語が句意を一段と飛躍させてゐることは雅言が、平言中に含まれて、特殊的な效果を擧げてゐるのと同樣であります。

次に今人の句を例示して寸評を試みることにいたします

くされ縁雨にふりこめられたやう　（曙草）

苦勞なら一緒にするとぬかしたり　（露斗）

てきばきあほぐ朝のかんてき　（山雨樓）

横文字を讀むラシヤメンの女優卷　（句念坊）

「くされ縁」の句は、離れやうとしても離れられない俗に云ふ惡緣の二人の憂鬱さをしと〳〵と降る雨に降りこめられたさまにたとへた句であります。が、くされ縁と云ふ俗語で、句の內容のすべてを想像させる力が含まれてゐると思ひます。

「苦勞なら」の句は、罵つて云ふ言葉のぬかすといふ俗語で句意を強調させたところにこの句のいのちがあるのであります。句品はいささか落ちるが、一寸面白い句であります。

「てきばきあほぐ」の句は、七七型の句であり、それと斷定は出來ないが出勤前の風景を想像させられて、ほゝえましくなる句です。この句にしてもてきばきといふ俗語が表現效果を一〇〇パーセントにしてゐる譯です。最後の「横文字を」の句にしても、横文字を讀む女が單に女優卷であると云ふだけでは句の面白味は出て來ませんが、その女がラシヤメンであるところに墜ちた女の心境ものぞくことが出來るのです。しかしこの句はラシヤメンを詠んだ句として秀れてゐるとは云へないのでありますが、ラシヤメンと云ふ俗語がこの句を構成してゐることは認めねばならないでせう。ラシヤメンと云ふのは日本人で、內地に寄留する外國人の妾となつてゐる女を卑めて云ふ語であります。

（三）術語を用ひた句

術語又は專門語と云ふのは英語の Technical terms の謂ひであります。それ〴〵の畑で、專門的に使用される語を句に採りいれて、句意を適正化させるのに役立たせるのであります。これを他の語で云ひ表はそうとすると、隨分多くの言葉を使用しながらしかもその語の持つ意義を充分に云ひ表はすことが出來ないうらみがあるので、專門語をそのまゝ句中に採りいれるのであります。術語の持つ特徵は句意を的確にすることと、使用文字を短縮することであります。しかも內容に深みや復雜味を持たせることも出來るのであります。しかし、あまりに專門的な語彙を使用すると、一面難解な句になつたり、ひとりよがりの句になるおそれが多分にあるのであります。要は術語と云つても、その畑に於けるやや普遍性のある語であることが條件とさ

血圧降下に
アークレミン
錠剤
注射
血管アウトホルモンとアミン類似
山之內製藥

れるのであります。

句例によつて示しますと、

凡聖一如元旦のこころ知る　（路郎）

と云ふ句で、「凡聖一如」は佛語でありますから、術語なのであります。從つて、この句の場合でも、「ぼんせい一じよ」と訓まないで、「ぼんしよう一によ」と訓むのであります。

南無阿彌陀佛と炬燵へぐつと伸び　（雅鬼）

轉落の石の姿で無常來る　（橙舎）

の、「南無阿彌陀佛」も「無常」も佛語ですから、矢張り術語だと云へます。雅鬼も橙舎も比較的夭折の方で、雅鬼は病死でありましたが醫博であつた橙舎は往診の途次、自分の乘つてゐる自動車が郊外電車の下敷になつたため、世を早めただけに、この句を讀むと辭世句のやうな思ひがするのであります。

盜墓へ夕日は既に落ちてゐる　（路郎）

この句の「盜墓」も、野球用語で、所謂術語なのでありますが、あまりにも普遍化されてしまつて、術語の域を脱してゐるやうな感じがいたしますが、術語であることには間違ひありません。その證據にはこの盜墓の内容を他の言葉で表現して見ても、これほど簡頸に適切に表現する言葉が見つからないではありませんか。この一語によつて見ても術語の妙味が奈邊にあるかが判るであらうと思ひます。劇には劇の術語があり、鐵道には鐵道の術語があり、それぞれの畑に、それ〳〵の術語があり、そしてそれ等の術語が巧みに作句に活用されてゐることは、一々例句を示すまでもないことと思ひます。

（四）漢語を用ひた句

漢語は外來語に外ならぬのでありますが、襄に外語外來語を講述した際に、外語外來語を所謂歐米語に限定したので、漢語を用ひて、句の内容を適正化したものを更にこゝで解説することにしたのであります。

春眠を配給物におこされる　（一笑）

不朽洞山房にて

名も知らぬ山の起伏をうれしがり　（路郎）

春日遲々として仁王さん眠くなり　（白柳子）

完膚なく虫に盜されしキャンピング　（閑生）

靡下に集るは鶏ばかりなり　（二柳子）

作例としては以上にとどめますが、漢語を採り入れた句は幾らでもあります。ただ問題は漢語が漢語として、どれだけ役立つてゐるか、ゐないかにあります。右に例示した句で、圏點を附けた「春眠」「起伏」「春日遲々」「完膚」「靡下」等の語彙は、いづれも、その句の内容を飛躍させるために特に選まれた漢語なのであります。それ等の一つ〳〵に就て少しく述べて見ませう。

配給物は日日の糧であつて必要缺くことの出來ないものであります。その配給物と、春眠曉を知らずと云はれる春眠とは好對照だと云へるでせう。こころよい春の眠から、たたき起されて、あはただしい配給物の世界へ引張り出された生活描寫がこの句の生命であります。

「名も知らぬ」の句は、作者が大和の不朽洞山房での實感を詠んだ句であります。障子を開くと、墨繪のやうな山が遠く近くに折り重なつて一望のうちにあります。それを起伏と云ふ固い漢語で云ひ表はしたところに、この句のヤマがあるのです。「山又山をうれしがり」では漢として迫るものがありません。

「春日遲々」の句も、仁王さんにして春日遲日の語が水際立つて浮かび上つて來ます。仰山な云ひ方をしたところに仁王さんを寫し出すにふさはしい語だと云へます。

ホントに眠たさを感じたのは山門に立つた作者自身であつたことは云ふまでもありませんが、仁王さんを藉りて、春の日の長閑さを巧みに描出したのが、この句の手柄です。そしてこの句に画龍點睛をあたへたものは「春日遲々」と云ふ漢語の力に外ならないのであります。

「完膚なく」の句は文語體の寫生句でありますが、「完膚なく」と云ふ強い言葉でもつて句に生命をふき込んで居ります。キャンピングしてゐる人たちの澁面が、眼に見えるやうです。

「靡下に集るは」の句は、退職した人の淋しい心境を詠んだ秀れた句であります。

靡下の二字はこの句の脊骨をなして居ります。

在りし日の華やかさも、今の淋しさも、みな靡下といふ語に集約されて居ります。これ等の句に徵しても、漢語が持つてゐる大きな力に想到することが出來るでありませう。

しかし、漢語にしても尤も適正な語を選むと云ふことが優秀な作品を創り出す第一歩だと云ふことを知らなければならないのであります。

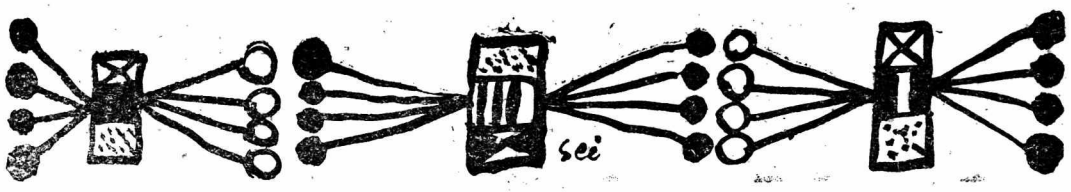
一括して申しますと、川柳に使用する語彙は前述したやうに、雅言であらうと、俗語であらうと、術語であらうと漢語であらうと、外來語であらうと、全く自由であつて、何等の束縛をうけない譯でありますが、それだけに、木に竹をつないだやうな表現となつたり、飯の中に砂が混じつたやうな結果を見ることも稀ではないのであります。要するにこの場合にはこの語以外にはないと云ふ尤も適切な語の發見につとめなければ佳吟は得られません。

品質優良

ペン先
針ピン
セムクリツプ

立川ペン先製作所

上野市



川柳塔

大阪市　武部香林

終電車ハヽアあの娘もダンサーか
誤解することを得意の人ばかり
人間がうよ〳〵勝手なことを云ひ
協力を置き忘れてる自由かな
夢を持てそしてスク〳〵伸びよ子等
菜園を荒らしてゐても子に甘し

兵庫縣　岩崎柳路

還暦の記念撮影皆んな無事

闘病吟

弱り目に祟り目病重なりぬ
窓際へ顔をさらして今日も寢る
地卵よ俺の病氣は何日治る
永病夜具の下から金を出し

奈良縣　西垣錦風

吊皮も人も疲れて奈良に着く
許可一つこうも澤山判のあと
配給の酒あり膝に子を乘せて
おもちやにと思つて飼つた猫孕み
生活に負けてなるかと軍靴はく

旭川市　宮田不二

注意事項僕にも一項目當り
薄給は妻へ感謝の日が續き
闇屋さんと話せばケチな我がくらし

尼崎市　水谷鮎美

放浪兒神父を知らず眠りゐる
二三杯のめばうれしき夜の街
六日だれ父は笑顔の尻からげ

平塚市　木村孤浪

送話器を内緒の電話手で圍い
踏切に立つ馬までが無表情
何やらんくわえてひよこ逃げまわり

布哇　内藤草一郎

これは〳〵十一文のハイヒール
今晩はハロー〳〵と三味が來る
スコッチで唄ふ二上り三下り
チャブ台へ昔戀しい黒い襟
お婆さんだけはピューアな日本語

松本市　石曾根民郎

ふるさとはひとつ兄弟老いながら
遭難をはげまし村の灯をかぞへ
別莊へ戀をのがれて山羊を聞く
俥夫走りながら世情を聞きかぢり
合唱のなかの想思の眸のなごみ

姫路市　夷一笑

孝行のしはじめ風呂の湯があふれ
氣のそまぬ許へたゝく蠅たゝき
夏みかん男半分のこしとき
梅の實のたやすくしそに染まりつゝ
虹が出て簾卷いてる勝手口

名古屋市　吉田水車

さるほどに血液型も忘れられ
千圓が三日でなくなる立ち話
新柄へある時尼僧立ち止り
アルバイト闇の手先になるなかれ
どうして見てもじやが芋の味

福井震災を見舞ふ

震災の一、二、三報眠に痛し

大阪市　市場沒食子

子を叱りついでに妻も叱つとき
自由主義みんな氣儘な子に替り
時ばかり喰ふいたづらな議論聞く
雀の食ひ殘したる麥を苅り
院長を訪へば習字の稽古中
近頃は儲けてゐるか寄附も出し
眼帶へ子が新聞を讀んでやり

奈良縣　尾崎方正

還暦の父第一線をまつしぐら
嬰鑠として還暦のヘルメット
忙げ〳〵五十歳の仕事死を想ひ
百萬圓の夢落着けよ〳〵
鞄が言ふ入れるは辨當それだけか
スフだらり柳は雨に素直なり

大阪市　水谷竹莊

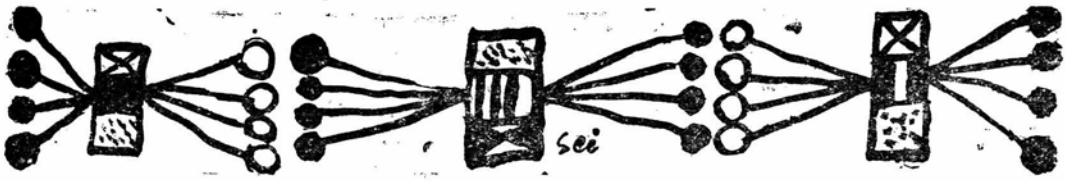
負けぬ氣の女將裏口やつてます
なぐさめた方も泣いてる仲居部屋
いゝ月夜向ふも二階あけてゐる

芦屋市　小澤史葉

洗濯のハタ〳〵ゆれる移民村
生活苦僕もラストを走つてる
まだ若いつもりでピンクのワンピース
哲學が好きで笑はぬ女なり
水音とかじかで旅の夜が白み
スグカヘレ嫁の話であるらしい

大阪市　竹内潮花

はつたい粉子供のような夢が散る
ひとときでよし情熱の花と咲こ
ものすべて勝たざる國にあるひがみ
夢にまで逢ひには來ないひととなり



滋賀縣　北川春巣

夏みかんさえぜいたくな暮しよう
會う度びに岳父サラリー訊いてくれ
飲む程に酒の値段を忘れて來
斷髮にしておばあさんすぐ分り

大阪市　木下幽王

銀行の廣さへ腹の立つ日なり
二重人格今日はどつちで暮さうか
妻として妻の祈の數多き
何のかのと朝晝晩の箸を持ち
故障して女車掌のコンパクト
親にまであゝ親にまで嘘をつく
お砂糖へはやカルメラだ綿菓子だ
子供もう電車なんぞに憧れず
稅務署が居るのか客も低い聲
花嫁は思鄕の念か笑はざる

新居濱市　在間小樓

良心をたゝけば世間に聞いてくれ
鎌を磨ぐ手でパーマーをかきあげる
カーネーションの赤さ眼にしむ未亡人
愚痴でなく女房の言ふが本當なり
台所夏を知らせる音になり

神戸市　大鶴喜由

あんなにしかつておいたに亦逢うて
美辭麗句相手にするにわからわし
平凡な日の幸をしる四十九
いさゝかは法に觸れたるチツキの荷
ちよつとやそつとの嘘では貸さぬなり

尼崎市　早川聽松

御佛に仕え居る身で爭議とや
許された國旗も燒けたまゝで無し
インフレに女房の白髮ふえたこと
勞基法蟻は夢にも知らぬなり
鮎食いに地方巡視といふ名にて
蚊帳の蚊も實は出口を探してる
同權になつても焦げは妻が食い
ローソクにランプに歷史はくり返す

布施市　糸本醉月

幽靈田出來る日本の貪事情
喰へぬ身にまだ稅金の鞭を受け
眞面目さを買はれ閻屋へ雇はれる
目と耳を覆ひ日本の幸祈る

高槻市　手島一舟

宵の月ビールは友に喜ばれ
酒癖を心得つゝも呑みに行き
ダンス〳〵仕事の面も考へず

大阪市　土井文蝶

PTA餘興も見せて寄附の事
ふと我に歸れば春はすんで居た
ぶちあけもすんで驛員水を撒き
バンドの穴一つ前進さす遲配
氣やすめのつもりか知事の歸阪談
夏やせを眼鏡のつるに敎へられ
子へ買うた土産女にへつられる

茨木市　下山清潮

釣友が來て殘業を淋しがり
未亡人淋しく朝の膳につき
曾根崎のラッシュに易も地下へ降り

高槻市　久連松春月

病人と間違ひそうな療養所
勞基法仕事やめよに決めて有り

大阪市　稻葉鳩花

大學を出て母と來る墓參り
雨戸うつ雨も靜かに君とゐる

大阪市　南鼓扇

櫛の齒の樣にボラ釣り並んで居
いゝ音だつせと質流れの時計
塗れるだけ塗つて後妻が嫁して來た

茨木市　岡田紫雲

逢曳へ虫さへ聲をころして居
水虫の言譯もして宵の風呂

布施市　大塚一球

てか〳〵に分けて組合幹部です
內閣をハリ倒したい社說讀む
敗れたと言へど女のけば〳〵し
ダンサーの歸ればおしめ干す身なり
花嫁になる日を言わず事務をとり

奈良縣　白牛奇朗

ガラスを拾ふ女のたくましい
性病科其の言譯けの面白く
三尺の店で間に合ふライター屋

岡山縣　山分北路

虹の間を牛はゆう〳〵草を食ひ
風鈴の塵をはらつて夏を呼ぶ
實力を知つてゐるから遠く吠え
頰杖をつくひまもなく痩せてゆき
雨の音靜に聞いたとしもあり
もう何度追つて通知を聞いたこと

吹田市　野本呑水

子を負うてゐるのから買ふヤミ莨
居住權だけへ家買う氣が動き
五人目が遲配かまわず生れてき

○

松山市　前田五健

通譯も少し味見る見本酒
內閣は凡打三振泥試合
その裏に意地も手傳ふストライキ

大阪市　橋本綠雨

停年の淋しさ物價あがるのみ
明治生れ忘れ切れない事多し

柳樽の剽竊句（下）

冨士野　鞍馬

百三十七編
宿下りの朝寝に蚊帳の片はづし　（樽七一）
神世にもだますは酒と女なり　（樽初七三）
一生の極彩色に嫁作り　（拾初）
かんざしも秤にかゝるしざとなり　（樽二）
桶ぶせは元手のいつたごうさらし　（拾八）
蹴られるとだまつては居ぬ銅盥　（樽七三、七八）

百三十九編
そつといゝ大きく笑う面白さ　（武初）
ほめられる所できれる三の糸　（樽一一）
ひまな日は暦見ている結納屋　（樽八七）
小間物屋これは修羅出來ません　（末四）

百四十一編
それは草だはなこんなのがよめ菜　（樽三三）

百四十二編
伊勢平の息子三千兩がごら　（樽六八）

百四十三編
では違いますという間に塀を埋め
洗ひ髪脇の下から人を呼び　（武四）

百四十四編
御登城を見よや東まの男振　（樽七三）
法華經へ鮎の子をする伊澤川　（樽四）
傾城はとつばづしたを恩にかけ　（樽初　拾八）
金持を見くびつて行く鰹うり　（樽一七　〃二四　拾初）
兼好も伊勢屋は馬鹿だなあ鰹　（樽二三）

百四十五編
八百五町十月の只晦日　（樽二五）

百四十六編
柿の皮こうむくものとぬつと立ち　（樽二、五六）
湯に行て女房出勤仕り　（傍三）
祐經の疵二の太刀が深手なり　（拾六）

百四十七編
似氣なきは花の名所に嵐山　（樽三五、〃二八）

百四十九編
神主は人の頭（あたま）の蝨を追ひ　（拾四　樽三二）
虫干にしかられて居る武者一騎　（樽四、九一樽初）

百五十編
皮きりは女に見せる面でなし　（樽三　拾初）
きのうから炬達にかけてありますよ　（樽二　〃二四）

百五十一編
負けそうな風俗はなし土俵入　（樽一五）
どろの附く物とけ見えぬ御所車　（武初　樽三三、二七、七一）
能見える八つの景色を堂で響め　（傍初）

百五十二編
六あみだ皆廻るのは鬼婆ア　（樽三三）
信心は半分うさの捨所　（樽二三）
嫁にまかせて置ますときつい嘘　（樽六〇）
金持の人魂行きつ戻りつし　（拾三）
白くあるものとは見えぬ洗ひ髪　（樽九　〃二八）
二十八無沙汰の墓へ詫て泣き　（樽二五）

百五十三編
無理な異見は魂を入かえろ　（拾七）

百五十四編
洗つても踏繪の足は氣にかかり　（武一八）
不屈な工夫一且請出され　（傍五）

百五十五編
美しさ親はとんびにたとへられ　（樽三五）

百五十六編
天蓋屋こがれた文を見付出し　（樽三三）
大あくび棚の御神酒を見付出し　（樽一八　〃八五）
雨垂を手へうけさせて泣やませ　（樽三）

百五十七編
泣止んだ禿たいこと指つきり　（拾七）
名所より我家をほめる旅戻り　（樽七一）
緋ちりめん少しは風も吹せたし　（樽三九）

百五十八編
赤鯖蛉空を流るる立田川　（樽初）

百五十九編
人は人なぜ歸らぬと親父いい　（樽九、〃一三六）
人間の開眼をする宮參り　（樽三〇　〃八五）

百六十編
燒酎で引のしをする向う脛　（樽一三四）
ぬかるみへ嫁を入れて螢にげ　（樽三六）

百六十一編
うぬ斗り承知でうなる河東節　（樽九一）

百六十三編
手袋の蚤をこらへる馬の上　（樽八五）

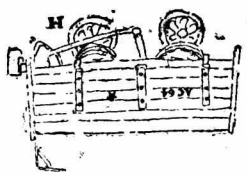
百六十五編
惚れられぬように孝女の身だしなみ　（樽五四）
罷り出でたるものは梶原で雨　（樽一〇八）

百六十六編
ぬけがらを短檠へかけて母案じ　（樽一二、一三四、一五〇）

百六十七編
藤武者びくり螺の音は田舍風呂　（樽五七）
財をはむ如しと備者の初鰹　（樽一二）
附け紐のある反古を出す呉服店　（拾九　樽三四）

以上列記した剽竊句は、何れも前句付の前句ではなく、殆ど題詠で十七音前句が獨立してからのものである。この盗用の樣子を考察して、その頃の句の流行振もうかがわれる。盗用する位の句はその頃の流れに合つたものでもあろう。そして盗用した時代と選者、作者を考えると、一段と深い参考にもなる。文化文政天保時代の、駄洒落や掛調等の所謂狂句萬能の中で、これ等の剽竊句が殆どそれでなく實暦天明調であることにも注意を要し、狂句時代でもやはりよい句はよい句であつたことがわかる。

今日から見ると「これ小判」とか「南無女房」とかその外所謂通り句が多く盗用されて入選していること等は選者の識見をうたがうものである。盗用者の表徳も選者も全部わかつているが、ここには發表しないことにした。前記二百數十句の盗用句を十二萬句の中から拾い出して、その原句の所在を突止めることは仲々の仕事で、これだけを發見するのに數年かゝつている。まだもつと克明に調べればあると思う。これがただ小さい趣味というのではなく、現代川柳作句によき参考にもなるなれば私の努力は報いられたというものである。（終）



雑筆春秋

ピエロの毒舌

下松　山根白星

「柳樽」「武玉川」等の古川柳をバイブルの如く信奉して、個性にも独創性にも乏しい作句傾向をマナリズム（マンネリズム）と呼ぶ事が出來れば、川柳のデフィニッションを無視して純主觀的な然るが故に普遍性に乏しい作句傾向を川柳のヴアンダリズムと呼ぶことが出來よう。前者は川柳の非詩性論者に多く後者は詩性論者が之を網羅する。前者は、無性格、性格破綻、虚無といふ言葉を代表しいたづらに數世紀前のユーモア、アイロニイの剽竊を生活して自己否定の巡禮の唄を唄うてゐるのである。後者は獨斷的なそして、ペタンチックなひとりよがりの一派であつて自己肯定の挽歌を奏でてゐるのである。此の兩者が現柳界の主流をなして今や鎬を削つて混試合を演じてゐる。此處に第二藝術論の外患に對してこの内憂をこの儘放置するならば、共倒れの悲運を招來し、且つ又柳界滅亡の危惧なきにしもあらざれば、この時に於て柳界内部萠芽のカリカチユアを辨証法理論を藉らずとも止揚する（妥協さすのではない）合の一派の出現が望ましいのである。いや吾人は哲學を語ろうと言ふのではない。お望みとあらば、ぐつとくだけよう。龍之介がモウパッサンを評して『彼は氷に似てゐる。尤も時には氷砂糖に似てゐる』と言つた。斯樣な柳誌が欲しいと言ふのである。現在の兩派に於て氷に似るべき筈の一派は、それにさへ凡そ緣遠い存在であるし、氷砂糖に似るべき筈の一派は余りもその心よい甘味とは違つてゐる。卑俗な言を使はうか。吾人は此處に氷にバターを塗らうと言ふのである。現柳界を睥睨するに非詩性論者は本格川柳の大旆を翳して傳統の孤壘を死守せんとする一洙の哀愁が漂ふてゐるし、詩性論者には往々に僞瞞的高踏性を高唱して人々を煙に卷かんとする圖太い横着さが潜んでゐる。前者には氷で熱を冷す（オリジナリテイ）必要があらうし後者には、バターを（人造バターに非ず。ユーモアアイロニイ等）塗つて大衆のものにする必要があらう。一方のみに囚はるれば柳界將來の發展はないし他の方に任すれば俳句やその他のカテゴリーに侵入して果ては節操を曲げて身を賣るの不貞を敢て働くであらう。劍豪宮本武藏は守離破の訓戒を與へてゐる。之を柳界に適應すべく飜譯すれば、第一段階の守は古川柳の研究（マンネリズムの認識）第二段階の離で客觀的な觀賞並びに主觀的奔放な亂作。第三段階の破は現在いふ所の本格川柳に個性獨創性乃ち思想を盛り込む。と云ふ意味になる。この樣な駄辯を勞して現柳界の兩者に訓戒を與へる（人身攻擊ではない）所以のものは兩者に寛大な思考錯誤法を採用させて彼らの自覺と形勢にまてばよいのであらうが、余りにも嚴肅な現實（インフレに依る紙の高價さと、その拂底並びに近時の郵稅値上げ等々）は暫時の猶豫も、ゆるさぬと信ずるが故に兩者に對して、アレゴリイを以て貢鯨を射ようと言ふのである。マンネリストとヴアンダル（甚だ失禮な言であるが）諸氏に對して柳界今後の在り方、唯一の發展傾向と思考せられる印象的な句の例を引かう。

天皇を迎へて　路郎

お氣の毒あれ〳〵帽子振り給ふ
天皇へ雨も埃のたゝぬほど
祝て欲しい慾へ天皇ほゝえまれ

義足へは天皇お眼を伏せ給ひ

これらの句は有名人の句なるが故に價値があるのではなく、一無名作家の發表した句であつても一躍柳界の寵兒になるであらうし、若しそれが雛鳳であつても卵殼を破る楔機となるは必定である。これらは川柳の常道を逸脱せず、その確固たる基盤の上にオリジナリテイを以てアイロニイを注入した普遍性を有する名句である。最後にこの一文を草するにあたり輿論の歴史人生日常の行爲の今日の進歩は人間悟性の天賦の力に依るのではなく、反復された、討議に依るのだからと謙虚な氣持ちで辯明し

暑中御伺（柳人交歡のページ）

大阪市天王寺區
宰相山町一四七
清水白柳子

大阪市東淀川區三津屋
北通四ノ二九
武部香林
武部若菜

阿倍野區旭町三丁目一四
須崎豆秋

自宅　阿倍野區帝塚山西一の十一
勤務先　西區立賣堀三の廿三
ダイヨ産業株式會社
電話新町一〇六〇番
木下幽王

今治市神明町
長野文庫

川柳雜誌社阿倍野支部

高橋亞鈍　亀山晴峯　紺屋島無人
科埜種美　近藤亞仁　増本翠露
蒲田鈍太　春木谷アキラ　大西野介

フタバ川柳社

川柳小女郎吟社
在間小樓
新居濱市中須賀花園市場

て置かう。又キザな詭辯ではあらうがコペルニクスやガリレオが生を禀けてゐなかつたら永遠に地球は廻轉しなかつたのだと、高慢チキな蛇足も付け加へて置かう。さもあらばあれ兩者の間から「それでも地球は動いてゐる」と論駁の鋭鋒を差し向げてくれるならば、吾人が先に辯明した理由に依つて無上の幸ひと存ずる次第ではあるが、この一文はあくまでピエロの毒舌であつて、白星の毒舌ではないのである。

オツト本音を吐きかけた。ピエロの素顔は、棺の中でのみお見せする掟で御座りやした。

—一九四八、七、一五—

病眼雑記

加賀　前田義風

事もあらうに米のなる木で目をつく、哀れとやいわんか、物事何に限らず習い始より馴れてしくじる。「損得は別百姓で二十年。」

徒歩で三里、汽車で二里、金澤の清水眼科へ日參、還暦祝賀の大會にも缺席。乘題へメイ吟を投句する。たゞ先生の更に柳壇へ咆哮されることを信じつゝ眼科の窓から梅雨雲にうつたへる。眞ッ赤な衣裳で這い出る先生のおどけた顔がみられない眼帶を又かけなほしてみた。

一夕の夢の如くすぎ去つた過去ではあるが柳壇につくされた努力は燦と光芒する。そうして更に大きいものが期待され信じられゝ。麻生路郎先生バンザーイ。祇園祭が眞近に迫つてきた七月の祝詞。

抱逸に就て

高田抱逸

私は熊本縣山鹿町生れで明治三十九年、町役場が全燒に遇ひ戸籍簿燒失再調査の折、母が「逸」とは知らず「一」でよかですたいと云つたので、それから抱一となつたので、雅号の「抱逸」は昔の本名である。

大會スナップ

—XYZ—

▼還暦句會の當日三階の大會場に到る階段の壁には、路郎師の作品を種瓜平画伯によつて、それ〴〵全紙大に漫画化されてゐるのが、入場者の目を奪つた。

▼丹波斗士氏が華やかな家内喜多留を擔ぎ込んで大会氣分をいやが上にあほつた。

▼脇田勇氏が道頓堀はオレの縄張りだから敬意を表しに來たと一杯機嫌で選者室へ乘込み路郎師へ握手を求め、愛煙家路郎師のポケットへピースをねじ込んで歸つた。

▲阿万万的氏は大型の寫眞機をかたげて旺んにフラシュをたく。これこそ〃平和と文化〃をシンボライズする歡喜の渦。

課題吟　白米

濱田久米雄選

白米がこぼれて空巣の逃げた道　松雄
白米の話聞こえぬ振りをする　舞扇
白米を焦がして女中落ちつかず　錦風
白米で太りお粥で死んで行く　曉明
宵の子は白米だつた交番所　喜勝
白米の闇値にふれぬ共稼ぎ　花代子
お父ちゃん白い御飯を喰べに行こ　清潮
白米へ年甲斐もなく腹を立て　ひさみ
白米のことから皆がとがり切り　潮花
白米へ今日は明かるい顔になり　静花
よくかんで食えと白米危ながり　不二
明けても暮れても銀めしの慾　喜由
おばあちゃんが來たゝ白米持つて來た　小樓
白米の夢も見たよと拘留者　静丸
白米へ子の箸妻の箸動く　幽王
白米を食べに來ました岩田帶　奇朗
白米にもつたいないがくせの母　草々
人・白米へ念を押された水加減　奇朗
地・白米の味が殘つた妻揚子　米市
天・白米を煮かさつて行く持參金　北路
軸・白米へうれしい妻の瞳と出合い　久米雄

暑中御伺（柳人交歡のページ）

東京都大田區調布嶺町三ノ四八
三澤汐風

布施市三ノ瀬一丁目四
糸本醉月

山口縣宇部市草江沖
宇部炭鑛内
粗影改メ　上林栗美

秋月宏方
和歌山今福北部三八

村松夢裡
大阪市南區疊屋町豎
日本樂器製造
株式會社大阪支店

不朽洞

麻生路郎
麻生葭乃

横濱市保土谷區岩崎町一〇
福田山雨樓

大阪市阿倍野區北田邊三四三
水谷竹莊

清水市下清水四九一
富士野鞍馬

大阪市城東區蒲生町四ノ七
稻葉實樣方
竹内潮花

廣島縣賀茂郡竹原町
竹原專賣出張所内
柳慶　弘津慶一

七人の父この夏の泳ぎよう
水谷鮎美
尼崎市西宮口開一八一

愛媛縣越智郡櫻井町
月原宵明

川柳小女郎吟社
同人一同
事務所　新居濱市西町
近藤英府方

猫柳　發行　芦城川柳社
例會毎月二十一日夜　小松市榮町三一江指家

大和町　伊藤茶佛
土居原町　市原東風
丸ノ内町　杯革双
安宅町　八田盜鐘
四町　馬場笑路朗
白山町　本田柳一路
中町　梶井井々樓
大文字町　谷口水聲
本折町　上野錦水
寺町　魚川柳々子
京町　野村松水
金澤市　山本素律
觀天町　山上兎月
榮町　江指靜古
龍助町　南柳三
大文字町　宮崎太魚

花地柳壇

投稿清規

▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先本社

川柳不朽洞會主催

路郎先生還暦祝賀

川柳大會

▼七月一日正午から開催（大會記事參照）

▼本欄には誌面の都合で三才及軸吟のみを發表する事としその他は次号に讓つた諒とされたい。

▼なほ受付混雜のため出席者名簿に多數の伺ひ洩れがある事と思ふ。御用捨を請ふ。出席者は左の通り（投句者名は省略）

路郎・葭乃・久米雄・良之祐・小樓・甦光・水車・龜歩・古風子・夢三・横河・三又路・梅々・清川荘・生兒・都斗夢・比呂四・市流・亞鈍・落葉・信夫・翠光・晴史・木聲・文久・康彦・正二・簑笠・貴志子・路三・峠の子・静夫・黒仙・星々・雲史路・灯々樓・紋太・雅光・普天・不二也・醉月・金矢文一朗・克巳庵・春秋子・柳一樓・迂佛・芳仙・雨青・秋魚・風溪・奇與子天湖・雀史・香月・滿佐留・只平・梅子・方眠・正穂・太路・正則・一笑・勢三・種美・雲雀・九一・晩浦・幻二紫泉・菊艸・秋京・路泉子・驛走・鯉一郎・芝有・史陽・白香・塊人・伊知呂・光一・和歌子・東洋樹・小壺・帆二・有町・孝三郎・三窓・烏荘・德三雄治・素生・目耳・點十・後山・榮江秋櫻・風詩人・嬉太葉・火山灰・枕山柳波・天加樓・弘川・松井・三思朗・破顔子・直三洞・六文・きはち・蝶二風來子・北路・宏方・葉平・松夢・三吉・純三郎・一郎・三星子・汐風・聽松・勝・充夫・竹山・砂計・ゆき江・八郎・一蟬・煙一・四緣・登喜雄・衞星・放村・紘四・紫風子・遊々・佳久二・逸花・狂次・南大・草々・萬樂・浪子・無鬼・楠水・案山子・更生・万よし・美水・思月・野介・晴峯・亞仁鈍太・水府・丁路・雅美・かれよ・秋之介・月輪・緣園・兆春・退一・齊一朗・伊能・國三・一泊・伍風・黒白子廣水・正樹・曉鐘・秋村・元光・柳童稔一・月南・紫陽・博也・淡月・洞人緣雨・美奈子・庸司・蝸牛・榮一・栞加保留・木々・花之・清伊知・世間人潮太・清司・濤朝・門天・葉々・公花正甫・青丹子・祭人・凡々・岸柳・水滴・正夫・呂香・砂人・八歩・斗士・句沙彌・登美子・一鐵・静川・圭太郎柳泡・日田緒・宗光・翠郎・京之介・佐保兒・竹二・丹路・遠見路・さわだ定美・風月・廣司・水月・克巳・風路眞佐男・文蝶・静一路・みのる・千舟茂・村上・默々・美紗・白公・秀舟・雨草・月見草・朴正・沙堂・水亭・溪花・新柳・萬湖・凡次・左太郎・甫典朔浪・黒朱・籌彦・小雅子・樫原・改笑・胡蝶・小柳子・鮎美・翻骨・三司正男・幸路・萬的・青舟子・水客・樽松・紫香・柳堂・和朗・若菜・瓜平・啄舟・喜代志・文柳・紫石亭・亂魚都風・悟洞・南光・超太・琴行・史呂吉・文化堂・港好・苦鬼夫・冬人・峯石・滿美女・美濃春・夕歩・さん太・秋花・角堂・乙平・友吉・生水・神峰沒食子・三郎・葉菜子・柳太郎・史葉康夫・良子・桃村・耕人・銀舎・庄月朗・明陽・角川・白沙・龍江・秀山・判二・柳洲・九司・立明・草山・三龜のぶを・方正・竹青・斜水・晴夫・梅風・河童子・祐一・鳩花・博信・柳魚凡學・ひさみ・椿・潮花・春月・清潮敏明・一舟・奇朗・花笑・一球・鼓扇・拙朗・花代子・紫雲・静造・夢裡・破天・重子・貴山・小松園・正明・梅里美智子・清孝・好郎・倍二・圭井堂・竹之朗・幽王・生々庵・香林・奈那・アート・梨里・一歩・静子・清美・進一郎・よしを・竹荘・琴水・勇・緣風阪南・忠雄・記山・都一・博人・優川新燈・益川・一碧郎

特別兼題「還暦」　廊生路郎選

人・矍鑠として還暦の半ズボン　方正
地・還暦の千日前をノーハット　水府
天・二号邸でも還暦の祝する　春巣
軸・六十一まだ情熱は燃えに燃え

兼題「生命」　奥村丹路選

人・生きてゆく意志が辭表の筆を持つ　喜代志
地・一筋の生命ほむらんとなる戀か　亞鈍
天・いのちとはこんなものだと虹が消え　句沙彌

兼題「珍客」　須崎豆秋選

人・珍客の汗へ井戸水汲んで來る　葉光
地・珍客へ日のあるうちの風呂をたき　素生
天・こゝだ〳〵と珍客が入つて來　花笑
軸・珍客をまんなかにして狹い蚊帳　豆秋

兼題「大阪」　市場沒食子選

人・大阪は裸で來ても喰べるとこ　香林
地・大阪の水へ衆愚の竿を垂れ　文久
天・喰ひだふれ道頓堀をのし歩き　潮花
軸・大阪で商賣をして京に住み　沒食子

兼題「眼鏡」　清水白柳子選

人・眼鏡越し借すとも借さぬも言はず　小松園
地・要るのかと忘れた眼鏡渡される　句沙彌
天・たまさかの母の眼鏡へ字を教へ　帆二
軸・共學の隣りも近視十三度　白柳子

兼題「ボート」　水谷鮎美選

人・貸ボート雨の湖畔に忘れられ　思月
地・美しい女ボートに頬かむり　水府
天・妻と漕ぐボート生活は語るまい　汐風
軸・漕ぎのぼる緣の風がふたりの詩　鮎美

兼題「鯛」　濱田久米雄選

人・水打つて鯛は日出度い使いする　水客
地・金屏風鯛も踊らん娶なり　喜由
天・よろこびへ鯛のうろこがとぶ日なり　良之祐
軸・鯛喰べて男もうける話する　久米雄

兼題「内助」　橋本緣雨選

人・内助へ褒れをみせぬ薄化粧　金矢
地・水虫に惱み内助は下駄で來る　砂人
天・古着屋へ行くさと内助たのもはず　久米雄

席題「汗」　岸本水府選

人・乳呑兒の汗は小指でとつてやり　庸司
地・生みの親他人になつて汗を拭き　小松園
天・アルバイト少女の汗の美しく　野介

兼題「ビール」　椙元紋太選

人・栓抜きも錆び久しいビール抜く　豆秋
地・配給のビール何度も抜かずすみ　有町
天・うれしさへビールの栓も飛んでくれ　帆二
軸・最中の味もよかろうがビールよし　紋太

席題「振付」　伊志田孝三郎選

人・振付けてみたいラヂオへ子の手振り　凡々
地・つまづいたのも振付の思ひつき　庸司
天・振付ける方も泣いて振付ける　塊人
軸・つと立てば振付け既に女なり　孝三郎

席題「ガラス」　堀口塊人選

人・あきらめのウインドのぞくだけでよし　竹荘
地・ガラス越し値札が僕を見て笑ひ　勢三
天・硝子屋の朝七色に陽をあつめ　汐風

席題「昆布」　脇田梅子選

人・絹すれの音を昆布茶が待つてゐる　良之祐
地・ただまつて昆布茶を飲んだ日を思ふ　太路
天・龍宮は昆布の林抜けた奥　かれよ
軸・きつかけは母で昆布茶を選はせる　梅子
共稼ぎ今日も揃こぶとろろこぶ　同

藤村雅光著

詩集

葡萄の房

豫約價　豪華版　二五〇円
上製版　一五〇円

澄明な詩風を以て詩壇にカムバックせる氏の最近珠玉篇二十數篇を收む

申込所　大阪市阿倍野區晴明通一ノ四一　不二書房

雜川

阿倍野支部結成句會（大阪）

六月十九日午后六時
フタバカツプ株式會社

折柄の雨天にも拘ず多數來會あり、路郎先生また御多忙中特に御出席盛會裡に十時閉會

手相・蚊帳・紙・會場・話

手相なんかいやどすきと舞妓逃げ　野介
手相見の愚談しばらくつゞく也　鮎美
儲つてゐるのが手相見て貰ひ　香林
失戀へ手相一向ふれて來ず　祭人
手相では因だがやはり逢に行き　小松園
遲强い手相とみられまたとられ　鮎美
さつき見た手相見と會ふ終電車　幽王
もう儲かつた氣手相に禮を言ひ　鈍太
手相でもかんしやく持を指適され　幽王
そんなはずがないがと兩手出して見せ　竹莊
男ハン手相屋まれて手をにぎる　晴峯
手相見は料金迄の所を見　亞仁
たいくつな顏で手相見亂歩讀み　鳩花
たゞで觀る手相はえゝことを言ひ　豆秋
手相見る女へ四五人立止り　青丹子
生命線ぼけて氣になる秋になり　正則
啄木の手相はあわれ因だつた　種美
柔らかい手に柔らかくいふ手相　亞鈍
大阪市南區いまは蚊帳が要り　白柳子
雷がこわいおやじの畫の蚊帳　鮎美
親子して酔うてる父を蚊帳に入れ　青丹子
けむしやらの足が蚊帳からぬつと出る　鳩花
蚊帳越に月の光を吸て見る　翠路
蚊帳の中一人は寢ずに本を讀み　竹莊
大の字に十疊吊に寢て見たし　香林
夜業して戻つて蚊帳の隅に入り　小松園
面倒くさいので蚊帳は押入の隅にほうめたまゝだ　路郎
お歸りかゝうか知らない蚊帳を釣り　種美
サンマータイムだつせと蚊帳を外される　豆秋
未亡人淋しい蚊帳を今日も吊り　史葉
蚊帳の中まで机持ち込まれ　沒食子
蚊帳つれば二人ツ切の時間が來　幽王
四疊半蚊帳吊る新妻の手の白さ　亞仁
手や足が蚊帳から出てる子澤山　竹莊
珍客へ一つの蚊帳に寢てもらい　青丹子
網引いたように蚊帳から起される　潮花
千代紙をにぎつたまゝ末子ねる　晴峯
包紙うろこ一枚ついて來る　千峰
紙吹雪きれいに見せて手品すみ　竹莊
云ひ当てられて鼻紙で汗をふく　白柳子
紙の値に見積られてる新刊書　沒食子
卷紙へ花瓶は宵の影を畳き　潮花
卷紙に書けばきれいな嘘になり　水容
紙にもの言はせてあとの冷奴　鮎美
メモにする心算の紙が多すぎる　天文子
セロハンで包でメロン生きてくる　豆秋
紙入れる事も知才のない老母　幽王
都會の裏へ紙くづが吹きたまり　水容
紙不足子の童心をゆさぶりぬ　香林
松屋町もう七夕の紙を賣り　白柳子
紙もよく刷なつかしく初版なり　野介
猪口の順まちまちになり立ちはじめ　天文子
空席のコーヒも冷えスプン冷え　野介
會場でにんにく臭い人と會ひ　幽王
集團見合もう會場になれてゐる　史葉
シヤンデリヤの影にちいさく備忘錄　野介
此處からは會場となる坑を打ち　祭人
會場へ來ればやつてる佐渡おけさ　沒食子
汗ふいていつも会場へ辷りこみ　亞鈍
會場がせまく幹事をまごつかせ　竹莊
矢印のまゝ會場へたどりつき　祭人
會場の裏では三味の音を合はし　豆秋
幕張つて今日は目出度い場所になり　水客
話より先に飯だと父歸る　千峰
坊さんの話も物値高を說き　幽王
これからが話でんれと居ずまいし　和枝
話にはならずカタログ仕舞だし　祭人
打明けて呉れたは子供出來てから　千峰
はだかにも馴れてモデルは眠くなり　靜一路
この鼻がモデルとしての値をふまれ　生々庵
禁煙のモデルやせてはならぬ歳　僖二
やせたいと言ふをモデルの母叱り　文蝶
モデルにおなりダンサーにおなりまだ嫁かず好郎　圭井堂
北風をモデル寒む〳〵きいて立ち　靜丸
入院の費用に足らぬ見舞金　靜一路
呑み仲間一本さげて見舞に來　圭井堂
部屋見舞ですと新婚裏はれる　佐男
会計は見舞も一緒に頼まれる　同
持てるだけ持つてお袋見舞に來　好郎
お饌のベットお見舞品が腐りそう　好郎
副業の石鹸先に使つて見　佐男
副業の方が儲かる運轉手　靜一路
副業に書く原稿にランプの灯　文蝶
サンマータイム副業もよし陽は高し　同
副業がいゝのか欠勤つゞき出し　好郎
近所では好きでしてますミシン踏み　同
これからが副業となるバスに乘り　同
副業のいつしか派手になるのれん　僖二
名刺にはないお仕事で暮して居　百生
副業の花緒縫ふ手に蚊がとまり　圭井堂
副業の兎に草の名も覺え　靜丸

雜川

大牟田支部句會（大牟田市）

六月　高田抱逸樓

仲裁・煙草・帽子

仲裁は親分らしい方に詫び　仁治
仲裁に出る氣を妻にくどかれる　抱逸
闇煙草巡査の顏もよく覺え　一葉
知りつゝも明日の糧に煙草捲く　抱逸
妻が捲く煙草はどうも細すぎる　龜水
女の子野球帽子を買ふとすれ　平人
上役の挨拶帽子に觸れただけ　山崎

雜川

日立櫻島句會（大阪）

六月十二日　南鼓扇樓

狸・傘・殺人

狸ふと社交ダンスがしとうなり　潮花
傘ほしたとこへボールがそれてくる　梅風
心ブラのお上りさんは傘さげて　鼓扇
傘こうもり傘修繕と消へて行く　清潮
青春の傘がもみ合ふ戎橋　花笑
蛇の目傘雪のおもみを手に感じ　定美
宿の傘かりて予定の日を終る　奇朗
傘たゝく雨の響が淋しい夜　鳩花
殺人のあつたその夜はみんなで寢　早苗
殺された人が見てゐるロケーション　鼓扇
殺人犯スナツプ寫眞が手がかりに　柳基
一振りで二三人死ぬ村芝居　ひでを
そむかれた恨み戀しい人を刺し　一球

阪田謄寫版

大阪市北區芝田町五二

商會

番九三

路郎先生の還暦祝賀川柳大會に際し御參會御出句下さいました方々並に御祝、祝電、祝句をたまはりました方々に、略儀ながら誌上を以て厚く御禮申上げますなほ当日は豫想以上の盛會のため不行屆の点も多々あつた事と存じます不悪御諒恕願ひます

川柳不朽洞會
理事長　中島生々庵

各位の御高配に對し滿腔の謝意を表します

川柳雜誌社
廠生路郎

全國川柳人各位

不朽洞會から

▼中島生々庵理事長は診療所を大會事務所に提供され、馴れぬソロバンをパチ〳〵。武部香林副理事長が本職を一時停止して連絡に大童、そこへ奥村丹路副理事長や岡王、亞鈍、潮花、豆秋、沒食子、小松園、鮎美、竹莊、紫香、白柳子、鳩花等の會員諸君が毎日のやうに詰めかけて、協議や事務で大車輪お陰で路郎師の還暦祝賀川柳大會が終戰後に於ける豪華版であつたことは不朽洞會の將來性を語る証左として同慶に堪えない。今後一層の御精進を祈る次第である▼不朽洞會員で大會のために來阪された方々は吉田水車氏（名古屋）、濱田久米雄氏（岡山縣）大森風來子氏（同）山分北路氏（同）岡村路三氏（山口縣）大西八歩氏（鳥取縣）戸倉普天氏（丹波）小西無鬼氏（同）夷一笑氏（姫路市）在間小樓氏（愛媛縣）奈良縣、兵庫縣等のやうな近縣は省略。

▼不朽洞會の例會を毎月本社の句會の前（午前十時—十二時）に開くことにしましたので會員は辨當持參で出席願ひたい。句作もよし質疑もよし、雜談もよし、先生から特殊な講義を聞くのもよし、冗談を交じへながら一緒に食事をするだけでも愉快だ。午後は一般の會だから少し早く出る用意があればこの愉快さが滿喫し得られることをお知らせする。

▼宮田不二氏（北海道）は何分遠距離のため先生の還暦句會に出られぬのを殘念がつて出句、同情の外ない。▼福田山雨樓氏（横濱市）は還暦句會へ出席の豫定が醫師の勸告で中止され目下靜養中である。▼木村孤浪氏（東京都）から「御惠與下さいました色紙毎日拜見して居ります目下色紙掛けのいゝのを物色してゐます色紙掛けも二、三あるにはあるのですけど氣に入つた色紙は氣に入つた色紙掛けに入れたいからです」云々。七月九日路郎主幹宛▼弘津柳慶氏（廣島縣）から「新生の値下で闇煙草も減少しましたが、これら煙草耕作が始まりますので田舍へ出張出張です」云々。七月二日路郎主幹宛▼山分北路氏（岡山縣）は七月一日から中國配電岡山支店玉島變電所へ就職された▼木下幽王氏は病魔に襲はれ目下靜養中である。前號で長女を擧げられたことを報じたが長男であり、六月一日生と訂正▼西尾栞氏は八月一日から維持會員に種別變更

新會員紹介

◉八月

月原宵明氏（愛媛縣）路郎主幹紹介
大西野介氏（大阪市）
龜山晴峯氏（大阪市）
科莖種美氏（大阪市）
蒲田鈍太氏（大阪府）
紺屋島無人氏（大津市）
近藤亞仁氏（大阪市）
以上亞鈍氏紹介
山根白星氏（下松市）柳慶氏紹介
鈴木幹夫氏（瀨戸市）路郎主幹紹介

にきびとり美顔水
桃谷順天館

高級化粧料容器には斷然！
ヤマキンの……
黒硝子
大阪市大淀區長柳西通一丁目四番地
山銀株式會社
電話堀川四四七番

川柳不朽洞會

指導　高安六郎　藤村雅光

麻生路郎

洞友

高澤一浪　岡村路三　山根梟人　關根山彦　岡島嶺泉　小西無鬼　山分北路　月原宵明　大西野介　龜山晴峯　科莖種美　蒲田鈍太　紺屋島無人

橋本綠雨　高鷲亞鈍　澤田四郎作　石井白面人　戸田古方　前山北海　古川魔花麗　木村孤浪　杉原大研子　好崎申仙　中島鐵洲　久連松春月　吉田斜水　在間小樓　尾綠之助　手島一舟　下山清潮　山口秋花　山根白星　近藤亞仁

寺井鋭々　西垣錦風　北川春巢　大森風來子　杉谷湖山　多田一波　増田耕民　大塚一球　小林文月　早川聽松　白牛奇朗　山分北路　月原宵明　大西野介　龜山晴峯　科莖種美　蒲田鈍太　紺屋島無人

賛助

池澤樂居　沖野岩三郎　長谷川一徹　龜井晨修　笠原路生　田村孝之介　高嶋米峰　高尾亮雄　長野晴濱　山本雨迷　藤村作　安川久留美　穎原退藏　山路閑古　淺田一　前田伍健　末弘嚴太郎　柴谷宰二郎　中田守雄　姪子省二　白川朋吉　西島○丸　中村祐吉　麻生葭乃　鳥山一歩　中島生々庵　奥村丹路　武部香林　戸倉普天　岩崎柳路　浪玲之介　小川靜觀堂　上田翠光　米本貴志子　大西八歩

—特別會員—

—維持會員—

福田山雨樓

岩崎山石　藤井友郎　內藤草一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　村松夢裡　大坂形水　須崎豆秋　石曾根民郎　中西おさむ　岩崎松代　宮田不二　福田妄夢　藤岡至藝　井上湧三　正本水客　黑川紫香　竹內潮花　清水白柳子　鈴木九坡　吉田水車　鈴木一笑　小橋隆如　岡崎祥月　高田抱逸　井村寒浪　小川恒明　稲葉鳩花　小坂慈雨來　西尾栞　菊澤小松園　新川博也　橋本美奈子　見灯竿　逸見灯竿　市場沒食子　夷一笑　須崎豆秋　鈴木石鹿　高田抱逸　井村寒浪　小川恒明　稲葉鳩花　小坂慈雨來　弘津柳慶　岡田紫雲　吉田圭井堂　野本呑水　土井文蝶　糸本醉月

—主會員—

紙業界の覇者フタバチエーン

藥用・化粧品用・あらゆる紙器

特殊紙器工業株式會社

紙カップ及食堂用紙製品

フタバカップ株式会社

大阪市阿倍野區晴明通一ノ四〇　電天下茶屋 2802 2808

あらゆる印刷

凹凸印刷紙業株式會社

大阪市阿倍野區松虫通一ノ一六　電天下茶屋2391

大峰山　下市口へ川戸間バス運轉　川戸ー桐川間徒歩六粁

大台ケ原　大和上市ー柏木間バス運轉

大杉谷　大台ケ原山の家　大杉谷秘ノ太山の家　に宿泊出來ます　（七月一日ヨリ）

クーポン券發賣

大峰山　A券　三〇円（往復一泊共）　B券　五〇円（往復一泊共）

大台ケ原山　大杉谷　六三〇円（往復バス一泊共）

發賣所　近畿日本鐵道社各案内所

近畿日本鐵道

世界ニ誇リ得ル最高級品

バターフライブランド

ヤマハ・バンドハーモニカ

濱松市　日本樂器製造株式會社

支店出張所所在地

東京・札幌・濱松・名古屋

大阪・神戸・福岡

大阪支店

大阪市南區心齋橋筋二丁目角

中島小兒科診療院

醫學博士　中島蓬太郎（生々庵）

大阪市南區三休橋南詰南へ西入

身邊雜記

本號は特輯として四ページ增大した。

◇

還暦の句會をしてもらつた自分は還暦と云ふことについてしみじみと考えさせられた。私の經て來た明治・大正・昭和の六十年間は從來の百年に比して遙に複雜多岐な變化と進化の歷史を持つものだと云へやう。

その中で、一短詩形に挺身して來た自分は幸福だと思つてゐる。私は父よりも六年、母よりも六十年生き延びた。そして川柳に四十五年間終始した。しかも惡闘と云へば云へるが此の惡闘は樂しい惡闘だと云へば云へないこともない。それはパイオニア的な自分の性格が當然甘受しなければならない惡闘だつたからである。ただ微力にして川柳の眞の價値を昂揚するのに充分でなかつたことは遺憾に堪えない。もう幾ら藻掻いて見ても余生は知れたものである。今は殘る歲月を出來るだけ有效に、世のため、人のために動く外はない。この意味から今後の私は從來猪突的であり、パイオニア的であつた仕事の締めくゝりをして行きたいと考えてゐる。

◇

大會はいろ／＼の意味でうれしかつた。人間を消耗品視した十年間の戰後に、こんなにも澤山な柳友が生き殘つてゐられたのかと思ふと涙ぐましかつた。自分も又どうにか斯うにか招切れずに、この大會に臨み得たことを欣ぶと共に各位の熱誠なる好意に萬謝してゐる。有難う。（路）

募集

課題吟募集

支店（十句）吉田水車選（九月五日締切）

藥瓶（十句）市場沒食子選（十月五日締切）

毎號募集（毎月五日締切）

近作柳樽（雜詠廿句）麻生路郎選

川柳塔（雜詠）麻生路郎選

文章（評論・研究・感想其他）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼『近作柳樽』は一般作家の雜吟を募る。

▼『川柳塔』への投句は不朽洞會員に限る。

B列5號　毎月一回一日發行

川柳雜誌　第三卷　第七號

一冊　金十五圓（送料二圓）

（藝能）半ケ年概算　金一〇二圓

一ケ年概算　金二〇四圓

昭和廿三年七月廿五日印刷

昭和廿三年八月一日發行

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地

編輯兼發行人　麻生幸二郎

大阪市住吉區万代西五丁目二五番地

發行所　川柳雜誌社

振替口座　大阪七五〇五〇

本號　金二〇円　〒二〇円